





「神戸ふるさと散歩」

岸本善英

# 神戸ふるさと散歩

「東灘区」「灘区」「中央区」編

## はじめに

神戸という街は、確かに近代的なイメージがある。しかし遥かなる時を超えて築かれて来た歴史がそこには存在する。

今だからこそ、伝統や文化、郷土の歴史を振り返り、滅びていったもの受け継がれたものの大切さを顧みて、いとおしく思う心を大切にしたい。

本書は神戸の史跡散策や心のゆとりの友としてご活用頂ければと思い執筆したものである。



## 「神戸の歴史」

「神戸」（かんべ…神社に付属した民戸）という地名は、現在の三宮・元町周辺が古くから生田神社の神封戸（じんふこ）の集落であったことに由来する。西国街道の宿場町であり北前船の出発地の一つでもあった兵庫津（ひょうごのつ）に近く、廻船問屋が軒を並べていた神戸村と呼ばれていた。

神戸三社（神戸三大神社）をはじめとする市内にある神社の神事に使うお神酒の生産にも係わり、有馬温泉や神封戸の形成も市名の由来に関係している。遣隋使の時代には、既に港は開かれていたが、平清盛により、経が島の近くの都である福原京が計画された前後に貿易の拠点として整備され、大輪田泊（おおわだのとまり）と呼ばれたことがその発展の始まりとされる。

その後、明治維新に至るまでは「兵庫津」と呼ばれ、京・大坂の外港・経由地として栄えたまちが神戸である。

「神戸ふるさとめぐり」 目次

・神戸九区の成立ち

「東灘」「灘」「中央」「兵庫」「長田」「須磨」「垂水」「北区」「西区」

・東灘区の歴史

「住吉川と水車」「東灘の古墳時代」「東灘と銅鐸文化」「岡本梅林公園」  
「保久良神社」「御影郡家」「石屋川トンネル跡」「本住吉神社」「雀の松原」「西  
国街道」「御影石」「神戸市立御影公会堂」「倚松庵」

・灘区の歴史

「桜ヶ丘遺跡」「赤松城跡」「水車新田」「都賀野」「神戸市立王子動物園」  
「旧ハンター邸」「六甲山」「近代登山発祥の地」「西求女塚古墳」

・中央区の歴史

- 「布引の滝」 「六英堂跡」 「神戸市立南蛮美術館」 「神戸市立外国人墓地」  
「神戸事件」 「北野異人館街」 「神戸電信発祥の地」 「神戸海軍操練所」  
「日本マラソン発祥の地」 「生田神社」 「相楽園」 「花隈城址」

## 神戸九区の成立

### 「東灘区」

東灘区は、芦屋市に隣接する神戸の東端である。

西に灘区、北に北区と接している。神戸市第二の海上都市である「六甲アイランド」は、東灘区内に属する。

本来はこの辺りが古来より灘と呼ばれた地域の中心地域であったが、神戸市に編入される時点では既に灘区は存在しており市長裁定で東灘区と言う名称に決まった。(一九五〇年・昭和二五年)

昭和六三年(一九八八年)、神戸市第二の人口島「六甲アイランド」が完成し東灘区となった。灘五郷の中心地である。

人口は約二十一万二千人

## 「灘区」

昭和四年（一九二九年）に六甲村 西灘村 西郷町が神戸市に編入され、昭和六年（一九三一年）には、神戸市の行政区設置に伴い灘区が誕生した。

ちなみに、国鉄「灘駅」の開業はこれより古く、大正六年（一九一七年）十二月に行われたが、現在の灘駅とは場所が異なる。摩耶ケーブルの開業も古く大正十四年（一九二五年）一月のことである。

人口は約十三万四千人。



## 「中央区」

明治十二年（一八七九年）に、八部郡神戸村、兵庫村、坂本村が合併して地方自治体である神戸区が発足した。（この区は行政区ではない）

大日本帝国憲法が公布される前年の、明治二十二年（一八八九年）に、菟原郡葺合村、八部郡荒田村（兵庫区）を併合。市制を施行し神戸市となる。

昭和五五年（一九八〇年）に、葺合区と生田区を統合して中央区を設置。人口は約十二万八千人。

三宮、異人館が並ぶ重要伝統的建造物群保存地区の北野町山本通。

有名な旧居留地、中華街の南京町、メリケンパーク、神戸ハーバーランド、ポートアイランド、神戸空港（マリニエア）、東部新都心のHAT神戸などがある。まさに神戸の中心地である。

## 「兵庫区」

昭和二十年（一九四五年）、行政区を再編成。湊区を合併し、湊東区の荒田地区、林田区の御崎・和田・吉田地区を編入。昭和二十二年（一九四七年）、武庫郡山田村、有馬郡有馬町、有野村を兵庫区に編入。昭和二十六年（一九五一年）、有馬郡道場村、八多村、大沢村を兵庫区に編入。昭和三〇年（一九五五年）、有馬郡長尾村を兵庫区に編入。昭和三十三年（一九五八年）、美囊郡淡河村を兵庫区に編入。昭和四八年（一九七三年）、兵庫区の北部を北区に分割。現在の兵庫区となる。

人口は約十万七千五百人。

雪見御所（ゆきみのごしよ）は、平安時代末期に摂津国福原京（現兵庫県神戸市兵庫区雪御所町）にあった平清盛の邸宅。

## 「長田区」

明治二九年（一八九六年）、八部郡林田村、須磨村大字池田を編入し、両地域を以って林田区を設置。昭和二十年（一九四五年）、行政区の再編成を実施し、従来の林田区を基礎として長田区が誕生。この時、吉田・御崎・和田地区一帯が兵庫区に、常盤町・千歳町・大池町が須磨区に編入され、代わりに須磨区から西代地区を編入し現在の長田区となった。

人口約十万人

長田の歴史は古く弥生時代まで遡ることができ、駒ヶ林の浜は神戸港発祥の地とも言われる。

人々の暮らしは、長田神社を中心とする地域から発展して来た。

長田区内からは高取山がよく見える。

## 「須磨区」

明治二二年（一八八九年）、須磨村が誕生する。明治四五年（一九一二年）、須磨町へと改称する。大正九年（一九二〇年）、神戸市に編入される。

昭和六年（一九三一年）、須磨区が誕生する。  
人口約十六万六千人。

古くから有名な地域で、平安時代にも多くの歌に詠まれている。

一ノ谷の古戦場もあり、須磨海岸は古来より白砂青松の美しい砂浜を持つ海岸として有名で、現在は阪神間随一の海水浴場である。

須磨区と垂水区の間にある境川を境界線にして、東が摂津の国、西が播磨の国となっていた。

## 「垂水区」

江戸時代は明石郡の塩屋、下畑、東垂水、西垂水、東名、西名、滑、中山、奥畑、山田（西舞子）、多聞（本多聞）の各村であった。後に、東名、西名、滑、中山、奥畑の五村が合併して名谷村（名谷町）となった。

明治四年七月（一八七一年）、廢藩置県により明石県の一部となる。

明治四年十一月（一八七一年）、明石県は姫路県に編入し飾磨県に改名。

明治九年（一八七六年）、飾磨県は兵庫県に合併

明治二二年（一八八九年）、町村制施行により、明石郡垂水村となる

昭和三年（一九二八年）、町制を施行し、明石郡垂水町となる

昭和一六年（一九四一年）、神戸市に合併、須磨区の一部となる

昭和二二年（一九四六年）、須磨区から独立して垂水区となる



昭和二二年（一九四七年）、明石郡伊川谷・櫛谷・押部谷・玉津・平野・神出・岩岡の各村を編入

昭和五二年（一九七七年）、東北部の須磨ニュータウン西部区域（名谷団地）を須磨区に割譲

昭和五七年（一九八二年）、昭和二二年に編入した地域を西区として分離し現在の垂水区となる。

人口約二十二万人。

淡路島や播磨地区から神戸市にかけて、「いかなごの釘煮」という郷土料理があるが、発祥の地は垂水区塩屋町である。



(塩屋駅前 魚友跡地碑)

## 「北区」

昭和二二年（一九四七年）、武庫郡山田村と有馬郡有馬町・有野村を兵庫区に編入。昭和二六年（一九五一年）、有馬郡道場村・八多村・大沢村を兵庫区に編入。昭和三十年（一九五五年）、有馬郡長尾村を兵庫区に編入。昭和三三年（一九七三年）、美囊郡淡河村を兵庫区に編入。

昭和四八年（一九七三年）、兵庫区から分区され、北区が誕生

神戸市中心部が人口収納能力に限界に達した為に、後背地を合併して兵庫区に編入された。昭和四八年（一九七三年）に兵庫区から人口増加の為に分区され北区となった。分区当初の人口は、十一万六千七百三十九人であったが、宅地開発の進展により現在では約二倍に達し、神戸市では西区に次いで二番目に人口が多い。人口約二十二万六千人。

面積は神戸市全体の約四四%を占めている。

日本の名湯である有馬温泉を区内に抱え、名所旧跡などが多く点在し神戸市内有数の観光地としての魅力も大きい。



(有馬温泉街)

## 「西区」

明治四年七月（一八七一年）、廃藩置県により明石県の一部となる。

明治四年十一月（一八七一年）、明石県は姫路県に編入し飾磨県に改名。

明治九年（一八七六年）、飾磨県は兵庫県に合併

明治二二年（一八八九年）、町村制施行により、明石郡伊川谷村、櫛谷村、玉津村、平野村、押部谷村、神出村、岩岡村が成立した。

昭和二二年（一九四七年）、神戸市垂水区に編入され西区となる。  
人口約二五万人

垂水区と同様に明石郡に属していた地域で、隣接する明石市とも結びつきが強いが、かつては田園地帯・公共交通の空白地域であった。一九七〇年頃から、神戸市中心部のベッドタウンとして開発が進み、西神ニュータウンや



押部谷地域・玉津地域を中心に大きく様変わりし、同時に公共交通の計画をした区である。神戸市の新たな文化、現在のところ神戸市九区で最も人口が多く、市の三割近くを面積を当区が占める。昭和五七年（一九八二年）に垂水区から分区した。神戸市で一番新しい行政区であり、神戸市の西側に位置することから西神と呼ばれる。

この地域はの歴史も古く旧石器時代の遺物も出土している。明石川と伊川が合流する地点の北側で「新方遺跡」（しんぽういせき…玉津町新方）が発見された。旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺構遺物が確認されているが、弥生人集落跡の墓に矢じりの刺さったままの縄文人の遺骨が丁重に葬られていた。これは、戦いの証であるが、畏敬の念を感じるもので文化的にも高かったのではないだろうか。西区は農村としての面と近代工業地域としての面、そしてベッドタウンとしての面も持つ神戸九区の中では特異な存在である。

## 東灘区の歴史 「住吉川と水車」

六甲山麓の南には大河や大きな湖がない。瀬戸内海式気候である地域で水資源を確保する事は農業を行ううえで死活問題である。八月に降水量は極端に減るので、中小河川は重要な水源となる。古代では雨乞いの神事や祈禱が行われ、河川の分水嶺地では水争いが絶えなかった。

六甲山系から流れ出る河川は急流であった為に、古くから水車が多く設置され動力として活用された。大きな水力を得る事ができるので大正時代の全盛期には、住吉川沿いに軒を並べた水車場は、約八〇箇所にも及び一万個の石臼が据えられていた。

しかしその後、電力の普及で水車は急速に姿を消す事となった。

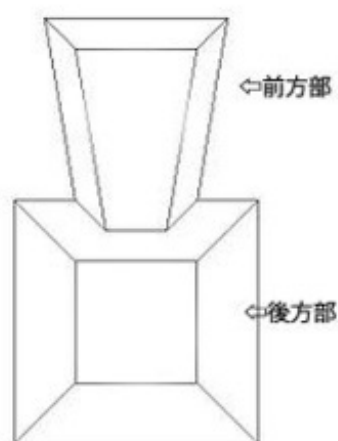
どうだろう、今の時代こそ水車の様な動力が復活すべきであって、自然の恵みである河川の水力で発電する様な仕組みは神戸にこそ相応しく思う。

## 「東灘の古墳時代」

東灘区では幾つかの古墳が見つかっている。

処女塚古墳（おとめづかこふん）は、全長約七十Mの前方後方墳である。

長らく前方後円墳と考えられて来たが、近年の調査で前方後方墳である事が確認された。



（前方後方墳）

処女塚古墳は、四世紀前半の築造と推定されている。

西に少し行くと、西求女塚古墳（にしもとめづかこふん…三世紀後半）があり、東側には、東求女塚古墳（ひがしもとめづかこふん…四世紀後半）がある。約二キロ間隔で並ぶこの古墳群は、万葉集や大和物語などに記されていて、地域に伝説を残している。海岸線に並ぶ姿は雄大であつたはずで、古代では、海路に行く人も陸路に行く人にも三つが並びそびえる景色は脳裏に焼きついたであろう。

考古学的には、前方後方墳である処女塚古墳や西求女塚古墳と前方後円墳である東求女塚古墳では、その成り立ちや政治的背景は異なると思うが、伝説にある様な三人の悲恋物語を築造の伝承と考えるのもロマン的なイメージの神戸に相応しいのかも知れない。

## 「東灘と銅鐸文化」

昭和九年、住吉町渦ヶ森の山中で道路工事中に銅鐸が発見された。



（銅鐸出土記念碑）



東灘区では、本山北町、本山南町や森北町からも銅鐸が出土している。

古代二〜三世紀の日本では、銅鐸文化圏と銅剣銅矛文化圏とに大きく分かれていた。九州を中心に栄えていた銅剣銅矛文化圏に対して、近畿地方を中心としていたのが銅鐸文化圏である。銅鐸文化が滅んだ後に古墳時代が始まるので、この時に大王が交代したか、祭事や神事を中心が代わったかのどちらかだろう。銅鐸の一部には明らかに壊されてから埋められた物もあるが、多くの場合は入れ子状態など大切に埋葬されたかの様に発見されることが多い。この時代に神戸でも何かが起こり常識が覆されたのだろう。前方後方墳を築造していた勢力と後に前方後円墳を築造する勢力の間にも権力争いがあったのではないだろうか。前方後円墳が主流となっていくと大和王権の勢力が全国へ拡大して行くこととなる。古墳時代の祭器としては鏡が使われたのではないだろうか、古墳から発見される副葬品としては鏡が非常に多い。

## 「岡本梅林公園」

神戸市都市公園条例による公園の正式名称は「岡本公園」であるが、一般には「岡本梅林公園」とも呼ばれている。一九八二年に完成した。

岡本の梅林の歴史は古く、山本梅岳の「岡本梅林記」には、羽柴秀吉が岡本の梅林を通過したことが記されているなど、かなり昔から存在していたようである。寛政十年（一七九八年）には、「摂津名所図会」に岡本梅林の図が登場するほど盛んであった。「梅は岡本、桜は生田」と言われた。

現在の岡本梅林と保久良神社境内にある保久良梅林は、神戸市と地元市民により昭和四十年代から五十年代にかけて岡本梅林の一部を復活整備したものである。

この梅林地帯は、古代の遺跡跡であって、石器土器などが多く発見された。古墳も非常に多く発見された地である。



(岡本の梅林公園)

## 「保久良神社」

祭神は、須佐之男命（すさのおのみこと）、大国主命、大歳御祖神（おおとしみおやのかみ）、椎根津彦命（しいねつひこのみこと）を祀る。金鳥山の南面に位置し古生層の上にある。付近では古代の祭祀遺跡が多く見つかつていて、弥生式土器や石器、珍しい銅戈（どうか）なども発掘されている。

本殿周辺には、磐境（いわさか）と思われる様な巨石が点在し、日本庭園の源流とも言われる。本社は延喜式内の古社で、「灘の一つ火」として知られている常夜燈は、大阪湾を望み沖に行く船の標識となっていた。

鷺の宮八幡神社は、保久良神社の里宮ともいわれる末社で、五月の宵宮では、各地域からだんじりが繰り出されて宮入りが行われる。なお、境内の樺（けやき）の大木は神戸の名木になっている。



保久良神社鳥居



鷺の宮八幡神社の檜

## 「御影郡家」

御影には郡家という名の村があった。周辺地域には、室内、堂本、古寺、宮守堂、新堂、寺前などの字があった。南には古社の本住吉神社があり、郡衙（ぐんが）も室内にあることから、この辺りが律令制の成立後に摂津国西部に置かれた、菟原郡（うばらのこおり、うはらぐん）の郡衙の地だと考えられる。

昭和五五年に調査が行われ、掘型一辺が一メートルもある堀立柱建物址が発見されている。付近かえらは奈良時代の須恵器・土師器などが出土している。

郡家とは律令制における郡を治める役場である郡衙の事であり、すなわちこの地に菟原郡の郡衙があったと考えて間違いないだろう。

## 「石屋川トンネル跡」

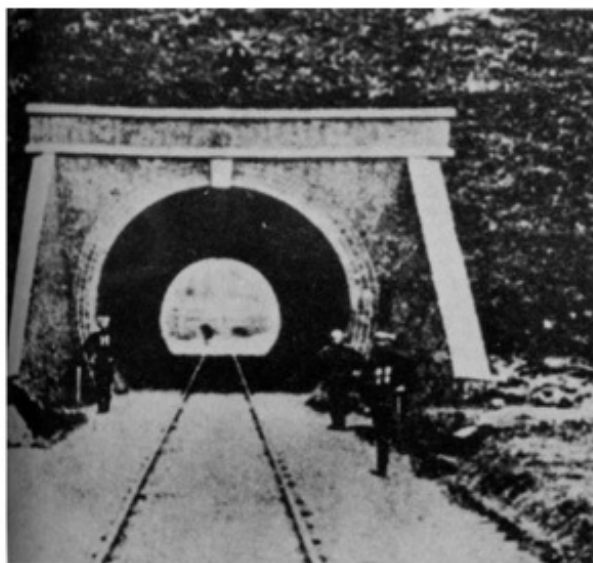
明治七年に、神戸と大阪を結ぶ鉄道が開通した。東京・横浜間に続いての開通で、三宮・住吉・西宮・神崎に駅が設けられた。

当初は、人が集中している海岸地帯に路線は計画されたが、酒造会社などの反対に合い山麓側を通る路線へと変更を余儀なくされた。当時の汽車は石炭の煙を出すので仕方がなかったのだろう。

しかし工事は難航した。石屋川・住吉川・芦屋川があり、困難な川底トンネルを掘らねばならなかった。石屋川トンネルは、外国人技師の協力によって、明治三年十月より始められた工事は、たった九ヶ月で完成した。

この石屋川トンネルは、日本最初の鉄道トンネルである。大正八年には複雑な線化に対応するための工事が行われ、この時にトンネルは解体されて水路橋となった。昭和五十一年には高架化のため、石屋川の地盤強度を高める必要か

ら埋め立てられた。現在、石屋川公園にトンネルがあったことを示す説明板が置かれている。



(石屋川トンネル)



## 「本住吉神社」

底筒男命（うわつつのおのみこと）・中筒男命（なかつつのおのみこと）・表筒男命（うわつつのおのみこと）「住吉三神」および神功皇后を主祭神として祀る。

住吉は「すみよし」は、元は「すみのえ」と読んだ。住吉の「吉」は古来では「エ」と読み、「住」（スミ）と「吉」（エ）の間に助詞の「ノ」を入れて、「住吉」は「スミノエ」と読んだが、平安時代の頃から「スミヨシ」と読むようになった。スミノエとは「澄んだ入り江」のことであり、澄江、清江とも書いた。

社伝では、日本書紀において、神功皇后の三韓征伐からの帰途に船が進まなくなり、神託により住吉三神を祀ったと記される「大津渟中倉之長峽（お

おつのぬなくらのながお)の地が当地であり、当社が住吉三神鎮祭の根源である。と伝え、そのために古くから「本住吉」と呼ばれるとしている。

元弘、建武の時代に戦乱が続き神領は荒れひどく衰えたが、足利將軍治世になってからは復興した。

神戸で最もだんじりが盛んな地域で、古代から明治維新直後まで、この辺りは「兎原郡山路庄」と呼ばれていた。本住吉神社は、山路庄七箇村、住吉・野寄・岡本・西青木・横屋・田中・魚崎の総社として祀られていたが、明治から昭和初期にかけて横屋・田中・魚崎の三地区が氏子別れし、各地でお祭りをするようになった。野寄地区・岡本地区・西青木地区は現在も本住吉神社の氏子で、野寄地区・岡本地区・西青木地区と旧氏子の横屋地区の四地区が、五日本宮の昼間に本住吉神社に宮入を行なう。



(本住吉神社)

## 「雀の松原」

住吉川河口、魚崎一带にあった美しい松原は、古くから景勝地として知られ、雀の松原と呼ばれていた。魚崎西町の児童公園内には、雀の松原を歌った二つの歌碑がある。

碑面には「竹ならぬかげも雀のやどりとは、いつなりにけん松原の跡、中納言公尹卿」、右側の小石碑表面には「雀松原遺址、杖とめて千代の古塚とへよかし是や昔の雀松原、平安山田寿房」、裏面には「地主松尾仁兵衛」と刻まれる。この石碑は阪神電鉄開通工事の際、軌道敷内にあつて取り壊された真の旧蹟を惜しんで、地主が所有地を地盛りし若松を植え移転したものである。住吉川の西に西松原、上松原、下松原という字名があつたが新住居表示を実施して消えてしまい、現在では国道四三号線の「松原」交差点に名を残すのみである。



(雀の松原跡碑)

## 「西国街道」

京と大宰府を結ぶ山陽道は、古代から重要な交通路であったが、中世頃よりその一部は西国街道とも呼ばれた。芦屋市東方まで内陸部を進んで来た街道は、これより海岸線沿いを進み、打出で二本に分かれた。国道二号線近くを通る本街道と、国道四三号線沿いを通る浜街道となつて西へのびた。

江戸時代、西国街道の本街道は、大名行列などが通り、一方、浜街道は、庶民の交通路として本街道よりもにぎわっていた。



(浜街道道標)

## 「御影石」

六甲南麓から採れる花崗岩は古くから良質の石材として利用されて来た。

花崗岩一般を御影石と呼ばれるほどに有名である。

主産地の御影・住吉でいつ頃から採石が行われ始めたのかはよくわからないが、豊臣秀吉の大坂城築城（天正十一年）に際しては、付近の山中から石が切り出されている。

京都国立博物館や平安神宮神苑には、「津国御影 天正十七年」と刻まれた橋脚石材が保存されている。

## 「神戸市立御影公会堂」

御影町時代この建物は御影町公会堂として建設された。設計は清水栄二が手がけた。昭和二十年（一九四五年）、三度にわたる神戸大空襲により御影の町は焦土と化し、公会堂も被災した。終戦後、御影町は自力での修復が困難であった為に、神戸市との合併を望み、昭和二五年に合併された。公会堂は神戸市によって改修を受け、昭和二八年（一九五三年）四月から使用再開された。大ホールは約一千人を収容でき、当時は神戸市最大の集会施設であった。

野坂昭如原作「火垂るの墓」で神戸大空襲の際、幼い兄弟が空襲の中逃げて来た川が石屋川であり、一息ついた兄弟が見渡した焼け野原にぼつんとたっていたのが御影公会堂である。現在も残る御影公会堂は阪神大水害、太平洋戦争、阪神・淡路大震災と三つの惨劇を見つづけて来た。





(御影公会堂)

## 「倚松庵」

倚松庵（いししょうあん）は、文豪谷崎潤一郎の旧居。

ここで執筆された代表作にちなんで「細雪」の家とも呼ばれる。

昭和四年（一九二九年）に、当時の武庫郡住吉村反高林（たんだかばやし）に建てられた和風木造建築で、谷崎潤一郎は、一九三六年から一九四三年まで居住した。

平成二年（一九九〇年）に、同じ東灘区内の住吉東町に移築し保存されている。

細雪の評価は高く、谷崎は毎日出版文化賞や朝日文化賞を受賞している。

また、作家の三島由紀夫をはじめ、細雪は作家たちにより多くの文芸随想等で幾度か取り上げて高く評価され、読書アンケートや名著選でも必ず近代文学の代表作に挙げられる。



(倚松庵)

## 灘区の歴史 「桜ヶ丘遺跡」

昭和三九年、桜ヶ丘町で壁土用の土砂を採取中に大・小十四個の銅鐸と七本の銅戈（どうか）が発見され、昭和四五年に国宝に指定された。銅鐸は弥生時代（約一八〇〇年～二〇〇〇年前）につくられた国産の青銅器で、複数の銅鐸が出土したのは当時非常に珍しい発見であった。現在、神戸市立博物館に保存展示されている。

十四個の銅鐸は、流水文（りゅうすいもん）銅鐸や、袈裟襷文（けさだすきもん）銅鐸など、いずれの銅鐸も線描の絵が鑄出されている。

銅戈七本は長さ三十センチ弱でほぼ大きさがそろっており、樋（ひ）を複合鋸歯（きよし）文で飾った大阪湾型銅戈である。

神戸地域で銅戈の出土は非常に珍しく貴重なものである。



(桜ヶ丘遺跡、銅鐸・銅戈)



## 「赤松城跡」

現在の神戸大学の敷地の一部が赤松城跡と言われている。

鎌倉時代末期の元弘三年（一二三三年）、播磨の豪族赤松円心が大塔宮護良親王の命令を受けて兵を挙げ、鎌倉幕府の京都六波羅探題の軍と戦ったことは「太平記」などに詳しく記されている。居城であった上郡の白旗城からこの地に赴き、円心は南朝のために幕軍と戦った。

赤松氏のこの地での奮戦があったからこそ、後醍醐天皇も都へ帰ることがかない、建武新政（建武中興）の基をつくった功績は大きかったのだろう。



（神戸大学敷地内に残る石垣）

## 「水車新田」

六甲登山口からケーブル乗り場へ行く道（神戸大学付近）に音ヶ平という字の地がある。この音ヶ平が後に開発され水車業が盛んになり水車新田村と呼ばれるようになった。

もともと神戸では、どこの川にも水車が設置されていたのどかな風景を見せていた。特に灘区では、河原・五毛・水車新田・篠原などが有名であった。灘区は水車を利用した油製造が盛んであつて、最盛期には一万石もの油を、京都・大坂・江戸へと積出していた。

都賀川上流の傾斜面の川水を利用して、灯油用に菜種を搾る目的での水車業が盛んになったが、一八〇〇年代初頭以降、幕府の統制で原料の菜種の入荷が減ったことや各地に水車業が興ったこともあり、灘の酒造用の米をつくる水車に転換。灘の酒造りに大きな役割を果たした。

大正の末から昭和の初め頃、電気精米、蒸気精米が進むにつれ衰退し、  
今では地名を残すのみとなった。



(水車新田跡)

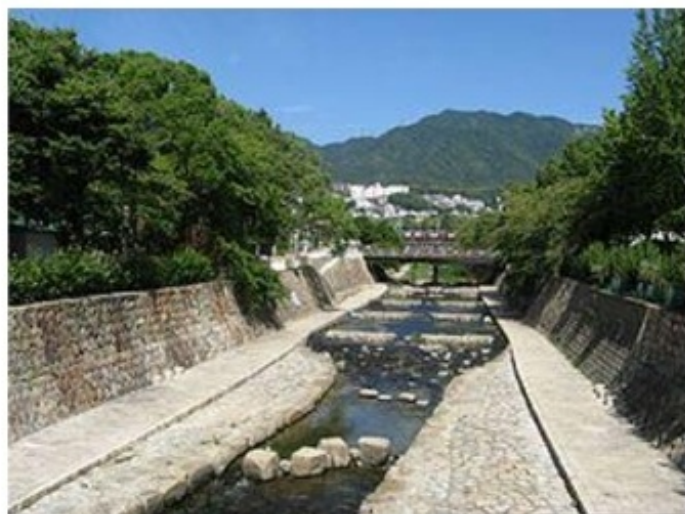


## 「都賀野」

日本書記の仁徳天皇の条および神功皇后の条に、菟餓野（とがの）の名がみえ、撰津国風土記にも刀我野（とがの）の鹿の物語が記載されている。

これら全てが灘の都賀野だとすることはできないが、平清盛の時代には、明確に灘の都賀が出て来る。この都賀は都賀庄と呼ばれた地域のことで、今の灘区内の内、徳井方面を除いた大部分を指し、北は山に連なり摩耶山を含む広大な地域。文禄・慶長に行われた太閤検地以後に村落は独立し、江戸時代に入って都賀庄は解体されて行った。明治二二年に町村制が実施されて、都賀川以西の十カ村合併し都賀野村となった。以東は徳井村を含めて八カ村が六甲村となり、海岸に近い大石村と新在家村は都賀浜村となった。その後、村名の変更があつて、都賀野村は西灘村になり、都賀浜村は西郷町と改められて、昭和四年にこれらの地区は六甲村の一部を除いて、神戸市に編入され

灘区となった。こうして、都賀の地名は区内を流れる都賀川だけに残った。



(都賀川)

## 「神戸市立王子動物園」

一九二八年に、諏訪山公園内に開園した諏訪山動物園（一九四六年閉園）を前身に開園。一九五〇年に湊川公園と王子公園を会場とし開催された日本貿易産業博覧会（通称 神戸博）の跡地を利用して一九五一年三月に現在地に移転開園した関西三大動物園のひとつで、神戸市灘区の王子公園内にある。

ジャイアントパンダ・コアラ・アムールトラ・アムールヒョウ・ユキヒョウなどの希少動物をはじめ多くの動物たちが飼育展示されている。

現在、日本で唯一、ジャイアントパンダとコアラを同時に見ることができ、る動物園である。

園内には、上映設備のある動物科学資料館や遊園地などが設置されているほか、実物の蒸気機関車 D51 が展示保存されている。春には無料で園内の桜を見学できる「夜桜通り抜け」というイベントが行われている。



(パンダ  
コウコウ)

## 「旧ハンター邸」

F.H.ハンター氏は、神戸にゆかりのある人で、天保三年（一八四三年）、英国北アイルランドで生まれ、慶応元年（一八六五年）に横浜へ渡った。

慶応三年十二月、兵庫開港のとき神戸へやって来た貿易商であった。

彼は日本での成功を目指したが、たんなる貿易商ではなく、この地に骨を埋める覚悟で事業を起し努力した人物。妻は日本人女性であった。

明治六年（一八七三年）ハンター商会を設立し、明治十二年大坂安治川河口に大阪鉄工所を創設して、造船や機械製造で事業は発展を続けた。

この大阪鉄工所が今日の日立造船所である。

大正六年（一九一七年）、七五歳で永眠するまで神戸北野に住まいした。

異人館「旧ハンター住宅」（国の重要文化財）が北野町から王子動物園北東隅に移築され、毎年四・八・十月に館内を公開している。



(旧ハンター邸)

## 「六甲山」

六甲山（ろっこうさん）は、兵庫県南東部、神戸市の市街地の西から北にかけて位置する山で、瀬戸内海国立公園の区域に指定されている。

南北に狭く、東西方向に長さ数十キロにわたって市街地の北側直近に迫っており、その山並みは神戸や阪神間、また大阪市内からも天然のランドマークとして機能している。また裏六甲側からの山系も高い山地に遮られないこともあり、三田市や三木市などからも望むことができる。古くから交通路や観光施設の開発が進められ、多くの観光客や登山客を集める。

南西端は塩屋駅付近の明石海峡に程近いあたりで大阪湾に接し、そこから山稜が北東方向に伸びる。山系のほぼ中央に位置する摩耶山で方向を東寄りに変え、東灘区と北区の境界に位置する最高峰を経て宝塚駅の西方に達する。東西方向の長さは三十キロ超であり、南北方向の幅はおおむね五キロメートル

ル未満、最深部の最高峰周辺でも十キロ程度である。

北西に続く丹生山系とともに六甲山地を形成し、西から北方の西半にかけては播磨平野東部の印南野台地、北方の東半には三田盆地が位置する。

また、北東方向に武庫川溪谷をはさんで続く丹波高地（北摂山地）とともに大阪平野の北限をつくっている。

最高峰の西にある灘区六甲山町の六甲有馬ロープウェイ「六甲山頂駅」から摩耶山山頂近くの摩耶ロープウェイ「星の駅」にかけて、多くの文化・保養施設やホテルなどが集まっている。

神戸電鉄有馬線より西側、神戸市長田区・須磨区内に位置する高取山、横尾山（須磨アルプス）、鉢伏山・旗振山（須磨浦公園・須磨浦山上遊園）などは須磨ニュータウンと河川によって主山稜と各個に分断されていることもあり六甲山とは区別される場合もあるが、全山縦走の経路であり、地理上も本山系に含まれる。



六甲山の大部分は、約一億年前（中生代白亜紀）に、地下深くで生まれた花崗岩でできている。第四紀、百万年前以後の六甲変動と呼ばれる地殻変動によって最高部が九〇〇メートル以上に至るまで隆起し、現在も変動を続けている。それによって生じた複数の断層が北東から南西に向かって主稜線と平行に走っている。いずれも北西側が東に向かって動く右横ずれ断層であり、横ずれが起ると同時に北西側が高くなる傾向がある。

これらの断層は阪神淡路大震災の震源断層である野島断層などとともに六甲・淡路島断層帯を構成している。

この地帯は古くから「むこ」の名称で呼ばれ、武庫、務古、牟古、六兒、無古などの字が当てられており、日本書紀神功皇后摂政元年の条には、「務古水門（むこのみなと）」の記載がある。語源については、畿内から見て「むこ」を意味するという説が有力であるが、諸説がある。

「六甲」の字が当てられるのは比較的最近で、元禄時代にできた「摂陽群

談」に見られるのが初期の例であり、享保年間の「撰津志」には「武庫山一名六甲山」の記載が見られる。

現在の六甲山観光は、明治時代以降に神戸外国人居留地の欧米人によって開発されたハイリゾートに始まる。山頂エリアにはイギリス人グルームらにより造成された日本で最初のゴルフ場である神戸ゴルフ倶楽部がある。山頂エリアの山道は、シエール道、シエール槍、アゴニー坂、ダウントリッジ、トウエンテイクロスなど、当時の外国人により命名されたものが現在も使われている。

神戸や大阪など人口の多い都市部に隣接した六甲山の開発は官民が競って争う場となった。また戦前から阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）と阪神電気鉄道は当時からライバル同士であり、この六甲山の開発事業もしのぎを削ることになる。昭和六年（一九三一年）には、阪急系の六甲登山架空索道（ロプウェイ）が先行開業し、翌年の昭和七年には、阪神系の六甲摩耶鉄道六

甲ケーブル線が開業し、六甲山上への観光客の争奪戦が始まることになる。また六甲山上でのバス認可などでも両社の攻防が繰り広げられた。神戸市では、昭和四年、民間からの鉄道やバスなど各種の開発要請のある中、市の背山一帯を理想的の大公園と化する計画をたて、道路整備や公園の整備、山上には植物園や高山植物園などの開発計画を描いた。

戦後、六甲山の復興に重要な役割を果たのが阪急電鉄の創業者である小林一三氏であった。小林は持ち前のアイデアを発揮し戦後に荒地となってしまう六甲山復興策を練った上で、兵庫県や神戸市などへ各種の折衝や提案などをしたとされ、今日の六甲山開発の功績者でもある。

## 「近代登山発祥の地」

江戸時代までの登山は、山を御神体として山頂を訪れる信仰登山が多かったが、六甲山にはそのような大きな信仰対象は無かった。しかし山の北側には有馬温泉があり、海岸の漁港から温泉街に新鮮な魚を運ぶための「魚屋道（ととやみち）」が山頂のすぐ横を通っていた。魚屋道の休憩所として山頂近くに「一軒茶屋」があつて、現在でも登山者の憩いの場として営業している。

西洋式の登山としては、一八七四年に、ガウランド、アトキンソン、サトウの三人の外国人パーティが、ピツケルとナーゲルを用いたいわゆる近代登山を日本で初めて六甲山で行った。ガウランドは、一八八一年に槍ヶ岳と前穂高岳に登山して「日本アルプス」を命名した人物で、サトウは富士山に最初に登った外国人としても知られる。

一九一〇年には日本初の社会人山岳会である神戸徒步会が結成された。

また一九四二年にヨーロッパ帰りの藤木九三らによって結成された

ロック・クライミング・クラブ (RCC) は岩山である六甲山を活動の場として、日本の登山界に初めてロッククライミングを紹介する役割を果たした。加藤文太郎も所属した山岳会である。



(一軒茶屋石碑)

## 「西求女塚古墳」

西求女塚古墳（にしもとめづかこふん）は、神戸市灘区にある全長九八メートルを超える大型の前方後方墳である。年代は、古墳時代前期である三世紀後半にあたる。

石室の石材は、地元のものだけでなく、阿波（徳島県）や紀伊（和歌山県）などからも運ばれており、地元の土器は出土しておらず、祭祀に用いられた土師器には山陰系の特徴をもつものが出土していることから、山陰や四国・南近畿などの諸地域と深い交流をもっていたことが推察され、瀬戸内海や大阪湾など水上交通に影響をもつ首長の墳墓であったとも考えられる。

処女塚・東求女塚とともに万葉集や大和物語などに登場する悲恋伝説「菟原処女の伝説」の舞台としても知られている。

処女塚古墳をささんだ東側には東求女塚古墳があり、三つの古墳は海岸線

に沿って一直線に、ほぼ等間隔の距離でならんでいる有名な悲恋物語の古墳の一つである。

三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡なども出土している。



(西求女塚古墳)

## 中央区の歴史 「布引の滝」

布引の滝（ぬのびきのたき）は、神戸の名所の中でも最も広く知られているひとつであろう。昔は市内に有名な滝があり、有馬のような温泉地があることを自慢にしていた。この滝は、六甲山系の瀬池（かわうそいけ）より発し、摩耶山・再度山の谷水を集め南下し巨岩の間から落下している。

布引の滝は、四つの滝の総称であって、日本三大神滝のひとつ。布引滝とも表記する。名瀑として知られる古来からの景勝地である。またかつて役小角（えんのおずぬ・役行者）が開いた滝勝寺の修験道行場として、下界とは一線を画する地であったが、現在は溪流沿いおよび布引山一帯から滝を経て布引ハーブ園へと至る遊歩道が整備され、新神戸駅からも気軽に立ち寄ることができるようになっている。六甲山の麓を流れる生田川の中流（布引溪流）に位置し、上流から順に、雄滝（おんたき）、夫婦滝（めおとだき）、鼓滝（つ



つみだき)、雌滝 (めんたき) からなる。

栃木県日光市の華厳滝、和歌山県那智勝浦町的那智滝とともに三大神滝とされ、日本の滝百選に選ばれている。

平安時代の歌集「伊勢物語」や「栄花物語」をはじめ、古くから宮廷貴族たちが和歌に詠むなど多くの紀行文や詩歌で紹介されている。



(雄滝 おんたき)

## 「六英堂跡」

布野引き丸山（新神戸駅すぐ北）にあった六英堂は、東京丸の内にあった、岩倉具視邸内の一部であった建物を移築したものであった。

岩倉具視が常住していた。明治六年九月、岩倉が欧州視察から帰国した後には、木戸、大久保、伊藤らがしばしば訪れ会合を重ねた。

昭和一六年に、明治天皇は二度、皇后は一度、病氣療養中の岩倉をわざわざお見舞いに来られた由緒ある建物である。

六英とは、岩倉具視、三條実美、木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通、伊藤博文を指し、長く宋の位牌と写真が飾られていた。六英傑と言われる。

岩倉具視が亡くなった後に、私邸は宮内省が宮城前広場整備のため買い上げ取り壊されるが、天皇行幸跡と云うことで、有志者によりこの建物だけは

新宿の国鉄敷地内で保存される。大正十一年には新たな保存先として、川崎造船所の創業者川崎家の神戸市布引の屋敷に引き取られる。初代川崎正蔵は薩摩出身で大久保利通の薫陶も受けていた。甥で養子となる二代川崎芳太郎も薩摩の出で、大久保公の縁の建物という事で引き受けられたようだ。

ここで「六英堂」と名付けられた。

戦後、川崎家の手を離れた布引の敷地に残された六英堂は新たな移転先を探し、昭和五十二年、西宮神社に移築保存された。

木造平屋建て、約二十九・八六坪、十二畳半二間と鞘の間からなる。

建物の解体移築と同時に、六英堂が神戸市布引に在りし昭和十年当時の「史蹟名勝天然記念物保存法」により、史蹟として文部大臣の指定を受けていたことを示す厚板の看板も、現在門内右脇にある石の標柱も移転された。

また、六英傑の額入り写真も保存されている。



(現在の六英堂..西宮神社)

## 「神戸市立南蛮美術館」

神戸市立博物館の前身の一つは神戸市立南蛮美術館である。

この南蛮美術館のさらに前身は、神戸出身の池長孟（いけながはじめ）が、自らの収集品を展示して、昭和一五年に開館した、私立池長美術館であった。

池長は育英商業学校（現・私立育英高等学校）の校長を務め、植物学者牧野富太郎に経済的援助を与えたことで知られる富豪である。

彼は昭和時代初期に南蛮紅毛美術の収集を始めた。南蛮美術とは、近世初期、日本へのキリスト教伝来に伴って制作された南蛮屏風、キリシタン絵画等の美術であり、紅毛美術とは、鎖国時代以後、日本が唯一通商関係を保っていたオランダの文物に影響を受けて制作された西洋美術の様式・技法を取り入れた美術作品のことである。彼はこれらの収集品を展示する。

池長美術館を昭和一五年、神戸市葺合区（現・中央区）熊内町に開館したが、

当時は戦時色の濃い時代であり、美術館は数回の展示を行った後、第二次大戦中の昭和十九年に休館。大戦後、コレクションの散逸を恐れた池長は建物とコレクションを神戸市に譲渡した。神戸市ではこれをもとに昭和二十六年、「市立神戸美術館」として開館。「神戸市立南蛮美術館」と改称するのは昭和四十年のことである。長年親しまれた南蛮美術館は神戸市立博物館の開館とともに発展的解消した。旧南蛮美術館の建物は現在神戸市文書館である。



(神戸市文書館…こうべしもんじょかん)

## 「神戸市立外国人墓地」

住所表示だと北区になるのだが、再度山山頂近くにある欧米外国人家族専用の墓地。再度公園の修法ヶ原池の西北に位置し、広大な敷地に、日本人の生活・文化に影響を与えた著名人を含む、世界六十カ国二千六百柱が埋葬されている。ここには堺事件で犠牲になったフランス水兵十一名が埋葬されており、今でも、フランス艦船が神戸港に入港する度に乗組員一同が訪れて祈りを捧げることが知られている。

一八六七年、旧生田川口東岸の小野浜に最初の埋葬が行われた。

一八九九年、小野浜の外国人墓地が閉鎖される。春日野（中央区籠池通）に外国人墓地が設けられる一九五四年、春日野墓地が閉鎖され、一九六〇年、現在の地への移転が始まる。一九六一年、現在地に移転が完了した。墓地は立ち入り禁止だが、展望台への立入は自由である。

神戸に居留地が設定された時の条約によって、明治二年兵庫県は、約二千二百坪を外国人共同墓地として開いた。明治三二年に神戸市が引き継ぐことになった。小野浜には余地がなくなったので、春日野にも外国人共同墓地を増やした。ところがその後、小野浜は神戸のビジネスセンターの中心となり、神聖にして静かに霊の眠るところとしては、ふさわしくなくなったので、各国関係政府の了承を得て、昭和二七年に再度山修法ヶ原へ移設された。

慶応四年（一八六八年）明治元年）二月、泉州堺でフランス人水平と土佐藩主の衝突事件が起こり、十一名のフランス水兵が殺された。その責めを負って十一名の土佐藩主が妙国寺で切腹した。宝珠院に切腹した土佐藩士十一名の墓がある。

フランス人水平十一名の墓は小野浜から現在の地へ移された。

当時フランス軍艦デュプレクス号は神戸に停泊し、堺へ測量に行った時の出来事で、外交史上同年正月の神戸事件とともに有名である。



三ノ宮駅から市バスで「森林植物園」か「再度山」行バス三〇分、「再度公園」下車徒歩三分（冬季運休）



（神戸市立外国人墓地）

## 「神戸事件」

神戸事件は、慶応四年一月十一日（一八六八年・明治元年）三宮神社前において備前藩（現・岡山県）の兵が、隊列を横切ろうとしたフランス人水兵らを負傷させたうえ、居留地の予定地を検分中の欧米諸国公使らに水平射撃を加えた事件である。明治政府初の外交問題となった。

この事件により、一時、外国軍が神戸中心部を占拠するに至るなどの動きにまで発展したが、その際に問題を起こした隊の責任者であった滝善三郎が切腹する事で一応の解決を見た事件。

慶応四年一月に、戊辰戦争が始まった。間も無く、徳川方の尼崎藩を牽制するため、明治新政府は備前藩に摂津西宮の警備を命じた。備前藩では一月五日に兵を出立させた。このうち家老・日置帯刀（へきたてわき）率いる八百人は大砲を伴って陸路を進んだ。

この際、慶応三年の兵庫開港に伴い、大名行列と外国人の衝突を避けるために徳川幕府によって作られた「徳川道」を通らずに西国街道を進んでしまった。一月十一日昼過ぎに、備前藩の隊列が神戸三宮神社近くに差しかけた時に、付近の建物から出てきたフランス人水兵二人が隊列を横切ろうとした。これは日本側から見ると武家諸法度に定められた「供割」（ともわり）と呼ばれる非常に無礼な行為で、これを見た第三砲兵隊長・滝善三郎正信が槍を持って制止に入った。しかし、言葉が通じず、強引に隊列を横切ろうとする水兵に対し、滝が槍で突きかかり軽傷を負わせてしまった。

薩英戦争にまで至った生麦事件の二の舞を避けるために、徳川幕府は「徳川道」（大名道）と呼ばれる街道を整備した。

その道筋は、西から、大蔵谷で街道と分かれて北に入り、高塚山を通過して、白川から藍那へ抜け東へ向かい、西小部から有馬街道を越えて、森林植物園

を東へ、摩耶山の北を進み柚谷峠（そまだに）を下り篠原を経て御影に出るという大迂回路であって実際にはほとんど使われずに直ぐに廃道となった。備前藩の隊列がこの道を通る可能性は低かったと考えざる負えない道である。



（神戸事件碑…三宮神社）

## 「北野異人館街」

慶応三年、諸外国に兵庫港を開いてしばらくして、外国人が居留地に近く優れた住環境を求めてこの地に居住するようになった。明治二十年頃から本格的な外国人住宅地として発展し、通称「異人館」と呼ばれる洋風住宅と和風住宅が混在した、神戸独自の異国情緒あふれる豊かな住宅街が形成されていった。

異人館の保存・活用が本格化したのは一九七〇年代以降のことである。住民や商業者が協力し、界隈の道に愛称を公募し、北野坂・ハンター坂・不動坂・北野通りなどの名が付けられた。これがきっかけで街路整備から異人館や景観の保全活動へと進んでいき、市が風見鶏の館や萌黄(もえぎ)の館を借り上げて公開したことをはじめ、昭和五五年(一九八〇年)には文化財保護法による伝統的建造物群保存地区の指定を受け、保存・修理に取り組むように

なった。さらには遊歩道の整備、シテイループの運行など、建物だけでなく、街全体の観光地化が進んでいった。

北野界限のもうひとつの楽しみが、異国料理の食べ歩き。神戸には三十カ国以上もの異国料理店があるが、中でもこの界限には中国、フランス、イタリア、スイス、インドなどの各国料理の店が多く、開港以来この地に住まった外国人のために外国人シェフが広めたという伝統の味が楽しめる。

さらに秋にはジャズストリートの聞き歩きが楽しめる。毎年十月、内外のジャズ・メンがつどい、街中にジャズの音色が響く。遠くからジャズファンが詰めかけ、まちは賑わう。

異人館街は非常に神戸の雰囲気とマッチし、神戸を代表する観光地となっている。

北野町の町名は、山麓にある北野天満神社から起った。



(北野通り  
異人館街)



## 「神戸電信発祥の地」

明治三年、この所に神戸伝信機局が置かれ八月二十日大阪との間に始めて通信が行われました。開局三十周年を記念して石碑が建てられた。

(神戸市中央区新港町、国道二号線 京橋交差点南東)



(神戸電信発祥の地碑)



## 「神戸海軍操練所」

神戸海軍操練所は、元治元年（一八六四年）五月に、軍艦奉行の勝海舟の建言により幕府が神戸に設置した海軍士官養成機関、海軍工廠（こうしょう）である。現在の神戸市中央区新港町周辺にあった。京橋筋南詰には神戸海軍操練所跡碑がある。

明治維新の中心人物として幕末の志士たちに大きな影響を与えた勝海舟は、神戸を拠点に壮大な構想を実現させようとした。文久三年（一八六三年）、鎖国政策の崩壊により海防の必要性が高まっていた折、勝海舟は神戸に海軍操練所の設立を提案した。これは海軍兵学校と海軍機関学校を兼ねたものであり、日本に欧米と肩を並べる海軍を建設するための足がかりを作ろうとしたのであった。翌年の、元治元年から勝は生徒の募集をはじめるが、幕府に反対する者でも入所を認めたことが大問題となり、わずか一年で操練所は閉鎖

されてしまう。操練所の開所期間は非常に短かったものの、その間に坂本龍馬・陸奥宗光（むつむねみつ）など新しい時代を担う人々を育て、日本の海軍の歴史にも大きな足跡を残した。この時に坂本竜馬が神戸に来たかどうかは定かではない。

海軍操練所跡は現在の中央区新港町にあり、錨（いかり）の形をした記念碑が建てられている。（神戸電信発祥の地碑の隣）



(神戸海軍操練所跡碑)

## 「日本マラソン発祥の地」

明治四二年（一九〇九年）三月二一日、神戸の湊川埋め立て地から大阪の西成大橋までの三一・七キロの「マラソン大競争」が行われた。

日本で「マラソン」という名称を使ったのは、この大会が初めてと言われる。参加申込者は四百人以上にのぼり、体格試験によって百二十人にしぼりこまれた。鳴尾競馬場で予選が実施され、出場選手二十人が決まり開催。

一位は、岡山県在郷軍人の金子長之助選手で、御影付近で、わらじの緒が切れるアクシデントがあつたが、脱ぎ捨てて走り続け優勝した。

神戸マラソンのスタート地点でもある神戸市役所前に、「日本マラソン発祥の地 神戸」の記念碑が建てられた。

日本で初めて 組織的に記録を競う形式の競走を行ったということとで、「日本マラソン発祥の地」とされている。



(日本マラソン発祥の地 神戸の記念碑)

## 「生田神社」

神功皇后の三韓外征の帰途、神戸港で船が進まなくなった為神占を行った所、稚日女尊が現れ「吾は活田長峽国に居らむと海上五十狭茅に命じて生田の地に祭らしめ。(私はいくたのながさの国に居りたいのです。うなかみのいそさちに命じて生田の土地に祀らせて欲しい)」との神託があつたと日本書紀に記されている。

当初は、現在の新神戸駅の奥にある布引山「砂山」(いさごやま)に祀られていた。延暦十八年(七九九年)の大洪水により砂山の麓が崩れ、山全体が崩壊するおそれがあつたため、村人の刀祢七太夫が祠から御神体を持ち帰り、その後到现在地にある生田の森に移転したと伝わる。

平城天皇、大同元年(八〇六年)に「生田の神封四十四戸」と古書には記され、現在の神戸市中央区の一部が社領であつた所から、神地神戸(かんべ)

の神戸（かんべ）がこの地の呼称となり中世には紺戸（こんべ）、近年に神戸（こうべ）と呼ばれるようになった。

神階は貞観元年（八五九年）に従一位まで昇った。延喜式神名帳では「摂津国八部郡 生田神社」と記載され、名神大社に列し、月次・相嘗・新嘗の幣帛に預ると記されている。

社殿は、昭和十三年（一九三八年）の神戸大水害、昭和二十年（一九四五年）の神戸大空襲、平成七年（一九九五年）の阪神・淡路大震災など何度も災害等の被害に遭い、そのつど復興されてきたことから、「蘇る神」としての崇敬も受けるようになっていく。

延暦十八年の大洪水の際、社の周囲には松の木が植えられていたが、全く洪水を防ぐ役割を果たさなかった。その故事から、今でも生田の森には一本も松の木は植えられていない。また過去には能舞台の鏡板にも杉の絵が描かれ、元旦には門松は立てず杉飾りを立てる。



(生田神社)



## 「相樂園」

相樂園は、都市公園・日本庭園。日本の文化財保護法に基づく登録記念物の最初の登録物件である。ツツジの名所として知られる。

三田藩士・小寺泰次郎が幕末から明治維新の混乱で困窮する三田藩の財政を立て直すべく、九鬼隆義、白洲退蔵（白洲次郎の祖父）らとともに神戸で事業を起こし実業家として成功を収め、小寺の私邸として建設されたもので、一八八五年頃から築造を始め一九一一年に完成させた広大な庭園と邸宅である。当初「蘇鉄園」と呼ばれていたが一九四一年に神戸市が譲り受け、名称を中国易経にある「和悦相楽」より取った「相樂園」と変えて一般公開されるようになった。

庭園の形式は池泉回遊式（ちせんかいゆうしき）を基本としているが、西洋文化の影響をうけて広場が設けられている。

戦前までは園内に小寺家本邸をはじめとする多数の建造物があった。しかし西洋風の旧小寺家厩舎（重要文化財）以外は全て一九四五年六月の神戸大空襲により焼失した。現存する大楠や蘇鉄林、大灯籠、塀、門などから失われた邸宅の雄大さをうかがうことができる。

第二次大戦後になって神戸市生田区（現・中央区）北野町から旧ハッサム住宅（重要文化財）が移築保存され、神戸市の迎賓館施設として相楽園会館、茶室「浣心亭」が建設され、さらに神戸市垂水区から船屋形（重要文化財）が移設されて現在の景観に至る。

小寺泰次郎の長男である、小寺謙吉はここで生まれ育った。

第十一代神戸市長であった彼は、三田学園の創設者でもある。

昭和十六年（一九四一年）三月に神戸市が譲り受け公園として整備した。



(相楽園 日本庭園)

## 「花隈城址」

花隈城は元は花熊城と書いた。永禄十一年（一五六八年）、織田信長の命令によつて、摂津の荒木村重が一年で築いたといわれる。信長が尾張から起つて国家統一の志を持つて京都に入り中国地方をも平定する足掛かりとするためであつた。城の地点は、神戸の海にのぞんで突き出た大地で、海陸の要害地を占めていた。

城の規模は、本丸、二の丸、三の丸があり、天守閣を備え、櫓（やぐら）もあり、本丸の周囲と二の丸、三の丸合わせた周囲とに堀があり、近世城郭の形態を完備して威容を示していた。

荒木村重は、その後、石山本願寺（大坂本願寺）の宗徒と呼応して信長に反抗したため、信長は池田信輝（恒興）らに花隈城を攻めさせた。信輝らは一挙に攻めるのは不利と見て、生田の森、諏訪山、大倉山などの要所に砦を

構えて、ゆっくりと攻めかけた。天正八年（一五八〇年）閏三月二日から初めて七月二日について落城させたのである。

落城後に信輝は、この城の材料の一部を利用して兵庫城を築き、一部の石は大坂城を築くときに運ばれたと伝えられている。この付近の土地の字に城に関したなど多くのこっている。城跡一部の花隈公演は戦後荒廃していたが、近年は城跡公園として整備され、その地下に市営駐車場が設けられている。

三木合戦のおり、別所氏は播磨三木城に籠城し羽柴秀吉軍と対峙していた。荒木村重の領国摂津は、三木城から六甲山地を挟んで南側に位置する。これによって、摂津の港で兵糧を陸揚げ花隈城から丹羽山を越え三木城へという新たな補給路ができた。

秀吉の部将黒田孝高が説得に向かったが、村重に捕らえられ有岡城に幽閉された。

花隈城も四ヵ月ほどで陥落し、毛利からの兵糧も途絶えた三木城は悲惨な結末をむかえることになった。



(花隈城址…花隈公園)



「神戸ふるさと散歩」 東灘区、灘区、中央区編も今後加筆いたします。

兵庫区、長田区、須磨区、垂水区、北区、西区編は、順次公開いたしますので、よろしくお願いいたします。

尚、記載してある数値などは、二〇一二年八月現在のものを採用しました。

本書で使用しました写真は、著者自ら撮影したものと許可を頂きまして掲載したものが大半ですが、一部写真に著作権者が不明なものがございます。お気づきの方が居られましたらお知らせ下さい。掲載許可の承諾を頂ける様に連絡をさせて頂きますのでお知らせ下さい。記述内容につきましては、筆者独自取材のものと過去の刊行物などを参考にいたしましたましたが、誤記などお気付きの点などございましたらお知らせ下さい。





「神戸ふるさと散歩」

岸本善英

# 神戸ふるさと散歩

「東灘区」「灘区」「中央区」編

## はじめに

神戸という街は、確かに近代的なイメージがある。しかし遥かなる時を超えて築かれて来た歴史がそこには存在する。

今だからこそ、伝統や文化、郷土の歴史を振り返り、滅びていったもの受け継がれたものの大切さを顧みて、いとおしく思う心を大切にしたい。

本書は神戸の史跡散策や心のゆとりの友としてご活用頂ければと思い執筆したものである。

## 「神戸の歴史」

「神戸」(かんべ)神社に付属した民戸」という地名は、現在の三宮・元町周辺が古くから生田神社の神封戸(じんぷこ)の集落であったことに由来する。西国街道の宿場町であり北前船の出発地の一つでもあった兵庫津(ひょうごのつ)に近く、廻船問屋が軒を並べていた神戸村と呼ばれていた。

神戸三社(神戸三大神社)をはじめとする市内にある神社の神事に使うお神酒の生産にも係わり、有馬温泉や神封戸の形成も市名の由来に関係している。遣隋使の時代には、既に港は開かれていたが、平清盛により、経が島の近くの都である福原京が計画された前後に貿易の拠点として整備され、大輪田泊(おおわだのとまり)と呼ばれたことがその発展の始まりとされる。

その後、明治維新に至るまでは「兵庫津」と呼ばれ、京・大坂の外港・経由地として栄えたまちが神戸である。

「神戸ふるさとめぐり」 目次

・神戸九区の成立ち

「東灘」「灘」「中央」「兵庫」「長田」「須磨」「垂水」「北区」「西区」

・東灘区の歴史

「住吉川と水車」「東灘の古墳時代」「東灘と銅鐸文化」「岡本梅林公園」  
「保久良神社」「御影郡家」「石屋川トンネル跡」「本住吉神社」「雀の松原」「西  
国街道」「御影石」「神戸市立御影公会堂」「倚松庵」

・灘区の歴史

「桜ヶ丘遺跡」「赤松城跡」「水車新田」「都賀野」「神戸市立王子動物園」  
「旧ハンター邸」「六甲山」「近代登山発祥の地」「西求女塚古墳」

・中央区の歴史

- 「布引の滝」 「六英堂跡」 「神戸市立南蛮美術館」 「神戸市立外国人居地」  
「神戸事件」 「北野異人館街」 「神戸電信発祥の地」 「神戸海軍操練所」  
「日本マラソン発祥の地」 「生田神社」 「相楽園」 「花隈城址」

## 神戸九区の成立

### 「東灘区」

東灘区は、芦屋市に隣接する神戸の東端である。

西に灘区、北に北区と接している。神戸市第二の海上都市である「六甲アイランド」は、東灘区内に属する。

本来はこの辺りが古来より灘と呼ばれた地域の中心地域であったが、神戸市に編入される時点では既に灘区は存在しており市長裁定で東灘区と言う名称に決まった。(一九五〇年・昭和二五年)

昭和六三年(一九八八年)、神戸市第二の人口島「六甲アイランド」が完成し東灘区となった。灘五郷の中心地である。

人口は約二十一万二千人

## 「灘区」

昭和四年（一九二九年）に六甲村 西灘村 西郷町が神戸市に編入され、昭和六年（一九三一年）には、神戸市の行政区設置に伴い灘区が誕生した。

ちなみに、国鉄「灘駅」の開業はこれより古く、大正六年（一九一七年）十二月に行われたが、現在の灘駅とは場所が異なる。摩耶ケーブルの開業も古く大正十四年（一九二五年）一月のことである。

人口は約十三万四千人。



## 「中央区」

明治十二年（一八七九年）に、八部郡神戸村、兵庫村、坂本村が合併して地方自治体である神戸区が発足した。（この区は行政区ではない）

大日本帝国憲法が公布される前年の、明治二十二年（一八八九年）に、菟原郡葺合村、八部郡荒田村（兵庫区）を併合。市制を施行し神戸市となる。

昭和五五年（一九八〇年）に、葺合区と生田区を統合して中央区を設置。人口は約十二万八千人。

三宮、異人館が並ぶ重要伝統的建造物群保存地区の北野町山本通。

有名な旧居留地、中華街の南京町、メリケンパーク、神戸ハーバーランド、ポートアイランド、神戸空港（マリニエア）、東部新都心のHAT神戸などがある。まさに神戸の中心地である。

## 「兵庫区」

昭和二十年（一九四五年）、行政区を再編成。湊区を合併し、湊東区の荒田地区、林田区の御崎・和田・吉田地区を編入。昭和二十二年（一九四七年）、武庫郡山田村、有馬郡有馬町、有野村を兵庫区に編入。昭和二十六年（一九五一年）、有馬郡道場村、八多村、大沢村を兵庫区に編入。昭和三〇年（一九五五年）、有馬郡長尾村を兵庫区に編入。昭和三三年（一九五八年）、美囊郡淡河村を兵庫区に編入。昭和四八年（一九七三年）、兵庫区の北部を北区に分割。現在の兵庫区となる。

人口は約十万七千五百人。

雪見御所（ゆきみのごしよ）は、平安時代末期に摂津国福原京（現兵庫県神戸市兵庫区雪御所町）にあった平清盛の邸宅。

## 「長田区」

明治二九年（一八九六年）、八部郡林田村、須磨村大字池田を編入し、両地域を以って林田区を設置。昭和二十年（一九四五年）、行政区の再編成を実施し、従来の林田区を基礎として長田区が誕生。この時、吉田・御崎・和田地区一帯が兵庫区に、常盤町・千歳町・大池町が須磨区に編入され、代わりに須磨区から西代地区を編入し現在の長田区となった。

人口約十万人

長田の歴史は古く弥生時代まで遡ることができ、駒ヶ林の浜は神戸港発祥の地とも言われる。

人々の暮らしは、長田神社を中心とする地域から発展して来た。

長田区内からは高取山がよく見える。

## 「須磨区」

明治二二年（一八八九年）、須磨村が誕生する。明治四五年（一九一二年）、須磨町へと改称する。大正九年（一九二〇年）、神戸市に編入される。

昭和六年（一九三一年）、須磨区が誕生する。  
人口約十六万六千人。

古くから有名な地域で、平安時代にも多くの歌に詠まれている。

一ノ谷の古戦場もあり、須磨海岸は古来より白砂青松の美しい砂浜を持つ海岸として有名で、現在は阪神間随一の海水浴場である。

須磨区と垂水区の間にある境川を境界線にして、東が摂津の国、西が播磨の国となっていた。

## 「垂水区」

江戸時代は明石郡の塩屋、下畑、東垂水、西垂水、東名、西名、滑、中山、奥畑、山田（西舞子）、多聞（本多聞）の各村であった。後に、東名、西名、滑、中山、奥畑の五村が合併して名谷村（名谷町）となった。

明治四年七月（一八七一年）、廢藩置県により明石県の一部となる。

明治四年十一月（一八七一年）、明石県は姫路県に編入し飾磨県に改名。

明治九年（一八七六年）、飾磨県は兵庫県に合併

明治二二年（一八八九年）、町村制施行により、明石郡垂水村となる

昭和三年（一九二八年）、町制を施行し、明石郡垂水町となる

昭和一六年（一九四一年）、神戸市に合併、須磨区の一部となる

昭和二二年（一九四六年）、須磨区から独立して垂水区となる

昭和二二年（一九四七年）、明石郡伊川谷・櫛谷・押部谷・玉津・平野・神出・岩岡の各村を編入

昭和五二年（一九七七年）、東北部の須磨ニュータウン西部区域（名谷団地）を須磨区に割譲

昭和五七年（一九八二年）、昭和二二年に編入した地域を西区として分離し現在の垂水区となる。

人口約二十二万人。

淡路島や播磨地区から神戸市にかけて、「いかなごの釘煮」という郷土料理があるが、発祥の地は垂水区塩屋町である。



(塩屋駅前 魚友跡地碑)

## 「北区」

昭和二二年（一九四七年）、武庫郡山田村と有馬郡有馬町・有野村を兵庫区に編入。昭和二六年（一九五一年）、有馬郡道場村・八多村・大沢村を兵庫区に編入。昭和三十年（一九五五年）、有馬郡長尾村を兵庫区に編入。昭和三三年（一九七三年）、美囊郡淡河村を兵庫区に編入。

昭和四八年（一九七三年）、兵庫区から分区され、北区が誕生

神戸市中心部が人口収納能力に限界に達した為に、後背地を合併して兵庫区に編入された。昭和四八年（一九七三年）に兵庫区から人口増加の為に分区され北区となった。分区当初の人口は、十一万六千七百三十九人であったが、宅地開発の進展により現在では約二倍に達し、神戸市では西区に次いで二番目に人口が多い。人口約二十二万六千人。



面積は神戸市全体の約四四%を占めている。

日本の名湯である有馬温泉を区内に抱え、名所旧跡などが多く点在し神戸市内有数の観光地としての魅力も大きい。



(有馬温泉街)

## 「西区」

明治四年七月（一八七一年）、廃藩置県により明石県の一部となる。

明治四年十一月（一八七一年）、明石県は姫路県に編入し飾磨県に改名。

明治九年（一八七六年）、飾磨県は兵庫県に合併

明治二二年（一八八九年）、町村制施行により、明石郡伊川谷村、櫛谷村、玉津村、平野村、押部谷村、神出村、岩岡村が成立した。

昭和二二年（一九四七年）、神戸市垂水区に編入され西区となる。  
人口約二五万人

垂水区と同様に明石郡に属していた地域で、隣接する明石市とも結びつきが強いが、かつては田園地帯・公共交通の空白地域であった。一九七〇年頃から、神戸市中心部のベッドタウンとして開発が進み、西神ニュータウンや

押部谷地域・玉津地域を中心に大きく様変わりし、同時に公共交通の計画をした区である。神戸市の新たな文化、現在のところ神戸市九区で最も人口が多く、市の三割近くを面積を当区が占める。昭和五七年（一九八二年）に垂水区から分区した。神戸市で一番新しい行政区であり、神戸市の西側に位置することから西神と呼ばれる。

この地域はの歴史も古く旧石器時代の遺物も出土している。明石川と伊川が合流する地点の北側で「新方遺跡」（しんぽういせき…玉津町新方）が発見された。旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺構遺物が確認されているが、弥生人集落跡の墓に矢じりの刺さったままの縄文人の遺骨が丁重に葬られていた。これは、戦いの証であるが、畏敬の念を感じるもので文化的にも高かったのではないだろうか。西区は農村としての面と近代工業地域としての面、そしてベッドタウンとしての面も持つ神戸九区の中では特異な存在である。

## 東灘区の歴史 「住吉川と水車」

六甲山麓の南には大河や大きな湖がない。瀬戸内海式気候である地域で水資源を確保する事は農業を行ううえで死活問題である。八月に降水量は極端に減るので、中小河川は重要な水源となる。古代では雨乞いの神事や祈禱が行われ、河川の分水嶺地では水争いが絶えなかった。

六甲山系から流れ出る河川は急流であった為に、古くから水車が多く設置され動力として活用された。大きな水力を得る事ができるので大正時代の全盛期には、住吉川沿いに軒を並べた水車場は、約八〇箇所にも及び一万個の石臼が据えられていた。

しかしその後、電力の普及で水車は急速に姿を消す事となった。

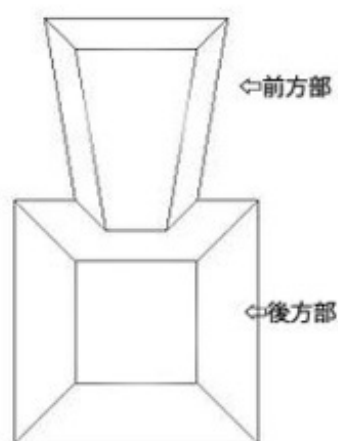
どうだろう、今の時代こそ水車の様な動力が復活すべきであって、自然の恵みである河川の水力で発電する様な仕組みは神戸にこそ相応しく思う。

## 「東灘の古墳時代」

東灘区では幾つかの古墳が見つかっている。

処女塚古墳（おとめづかこふん）は、全長約七十Mの前方後方墳である。

長らく前方後円墳と考えられて来たが、近年の調査で前方後方墳である事が確認された。



（前方後方墳）

処女塚古墳は、四世紀前半の築造と推定されている。

西に少し行くと、西求女塚古墳（にしもとめづかこふん…三世紀後半）があり、東側には、東求女塚古墳（ひがしもとめづかこふん…四世紀後半）がある。約二キロ間隔で並ぶこの古墳群は、万葉集や大和物語などに記されていて、地域に伝説を残している。海岸線に並ぶ姿は雄大であつたはずで、古代では、海路に行く人も陸路に行く人にも三つが並びそびえる景色は脳裏に焼きついたであろう。

考古学的には、前方後方墳である処女塚古墳や西求女塚古墳と前方後円墳である東求女塚古墳では、その成り立ちや政治的背景は異なると思うが、伝説にある様な三人の悲恋物語を築造の伝承と考えるのもロマン的なイメージの神戸に相応しいのかも知れない。

## 「東灘と銅鐸文化」

昭和九年、住吉町渦ヶ森の山中で道路工事中に銅鐸が発見された。



（銅鐸出土記念碑）

東灘区では、本山北町、本山南町や森北町からも銅鐸が出土している。

古代二〜三世紀の日本では、銅鐸文化圏と銅剣銅矛文化圏とに大きく分かれていた。九州を中心に栄えていた銅剣銅矛文化圏に対して、近畿地方を中心としていたのが銅鐸文化圏である。銅鐸文化が滅んだ後に古墳時代が始まるので、この時に大王が交代したか、祭事や神事を中心が代わったかのどちらかだろう。銅鐸の一部には明らかに壊されてから埋められた物もあるが、多くの場合は入れ子状態など大切に埋葬されたかの様に発見されることが多い。この時代に神戸でも何かが起こり常識が覆されたのだろう。前方後方墳を築造していた勢力と後に前方後円墳を築造する勢力の間にも権力争いがあったのではないだろうか。前方後円墳が主流となっていくと大和王権の勢力が全国へ拡大して行くこととなる。古墳時代の祭器としては鏡が使われたのではないだろうか、古墳から発見される副葬品としては鏡が非常に多い。



## 「岡本梅林公園」

神戸市都市公園条例による公園の正式名称は「岡本公園」であるが、一般には「岡本梅林公園」とも呼ばれている。一九八二年に完成した。

岡本の梅林の歴史は古く、山本梅岳の「岡本梅林記」には、羽柴秀吉が岡本の梅林を通過したことが記されているなど、かなり昔から存在していたようである。寛政十年（一七九八年）には、「摂津名所図会」に岡本梅林の図が登場するほど盛んであった。「梅は岡本、桜は生田」と言われた。

現在の岡本梅林と保久良神社境内にある保久良梅林は、神戸市と地元市民により昭和四十年代から五十年代にかけて岡本梅林の一部を復活整備したものである。

この梅林地帯は、古代の遺跡跡であって、石器土器などが多く発見された。古墳も非常に多く発見された地である。



(岡本の梅林公園)

## 「保久良神社」

祭神は、須佐之男命（すさのおのみこと）、大国主命、大歳御祖神（おおとしみおやのかみ）、椎根津彦命（しいねつひこのみこと）を祀る。金鳥山の南面に位置し古生層の上にある。付近では古代の祭祀遺跡が多く見つかっていて、弥生式土器や石器、珍しい銅戈（どうか）なども発掘されている。

本殿周辺には、磐境（いわさか）と思われる様な巨石が点在し、日本庭園の源流とも言われる。本社は延喜式内の古社で、「灘の一つ火」として知られている常夜燈は、大阪湾を望み沖に行く船の標識となっていた。

鷺の宮八幡神社は、保久良神社の里宮ともいわれる末社で、五月の宵宮では、各地域からだんじりが繰り出されて宮入りが行われる。なお、境内の樺（けやき）の大木は神戸の名木になっている。



保久良神社鳥居



鷺の宮八幡神社の檜

## 「御影郡家」

御影には郡家という名の村があった。周辺地域には、室内、堂本、古寺、宮守堂、新堂、寺前などの字があった。南には古社の本住吉神社があり、郡衙（ぐんが）も室内にあることから、この辺りが律令制の成立後に摂津国西部に置かれた、菟原郡（うばらのこおり、うはらぐん）の郡衙の地だと考えられる。

昭和五五年に調査が行われ、掘型一辺が一メートルもある堀立柱建物址が発見されている。付近かえらは奈良時代の須恵器・土師器などが出土している。

郡家とは律令制における郡を治める役場である郡衙の事であり、すなわちこの地に菟原郡の郡衙があったと考えて間違いないだろう。

## 「石屋川トンネル跡」

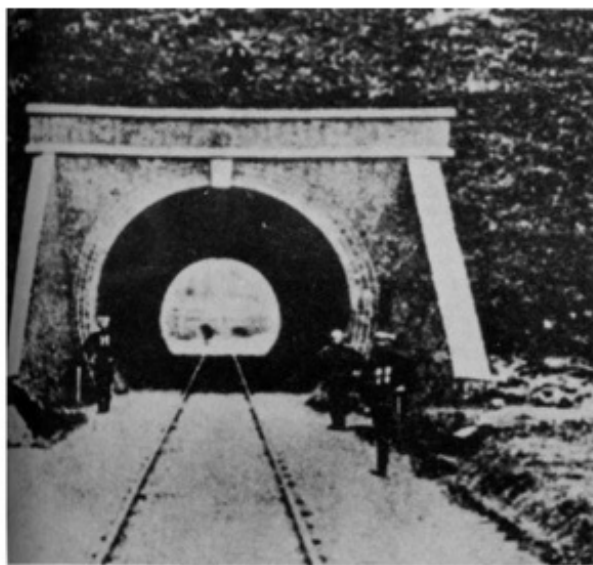
明治七年に、神戸と大阪を結ぶ鉄道が開通した。東京・横浜間に続いての開通で、三宮・住吉・西宮・神崎に駅が設けられた。

当初は、人が集中している海岸地帯に路線は計画されたが、酒造会社などの反対に合い山麓側を通る路線へと変更を余儀なくされた。当時の汽車は石炭の煙を出すので仕方がなかったのだろう。

しかし工事は難航した。石屋川・住吉川・芦屋川があり、困難な川底トンネルを掘らねばならなかった。石屋川トンネルは、外国人技師の協力によって、明治三年十月より始められた工事は、たった九ヶ月で完成した。

この石屋川トンネルは、日本最初の鉄道トンネルである。大正八年には複雑な線化に対応するための工事が行われ、この時にトンネルは解体されて水路橋となった。昭和五十一年には高架化のため、石屋川の地盤強度を高める必要か

ら埋め立てられた。現在、石屋川公園にトンネルがあったことを示す説明板が置かれている。



(石屋川トンネル)

## 「本住吉神社」

底筒男命（うわつつのおのみこと）・中筒男命（なかつつのおのみこと）・表筒男命（うわつつのおのみこと）「住吉三神」および神功皇后を主祭神として祀る。

住吉は「すみよし」は、元は「すみのえ」と読んだ。住吉の「吉」は古来では「エ」と読み、「住」（スミ）と「吉」（エ）の間に助詞の「ノ」を入れて、「住吉」は「スミノエ」と読んだが、平安時代の頃から「スミヨシ」と読むようになった。スミノエとは「澄んだ入り江」のことであり、澄江、清江とも書いた。

社伝では、日本書紀において、神功皇后の三韓征伐からの帰途に船が進まなくなり、神託により住吉三神を祀ったと記される「大津渟中倉之長峽（お



おつのぬなくらのながお)の地が当地であり、当社が住吉三神鎮祭の根源であると伝え、そのために古くから「本住吉」と呼ばれるとしている。

元弘、建武の時代に戦乱が続き神領は荒れひどく衰えたが、足利將軍治世になってからは復興した。

神戸で最もだんじりが盛んな地域で、古代から明治維新直後まで、この辺りは「兎原郡山路庄」と呼ばれていた。本住吉神社は、山路庄七箇村、住吉・野寄・岡本・西青木・横屋・田中・魚崎の総社として祀られていたが、明治から昭和初期にかけて横屋・田中・魚崎の三地区が氏子別れし、各地でお祭りをするようになった。野寄地区・岡本地区・西青木地区は現在も本住吉神社の氏子で、野寄地区・岡本地区・西青木地区と旧氏子の横屋地区の四地区が、五日本宮の昼間に本住吉神社に宮入を行なう。



(本住吉神社)

## 「雀の松原」

住吉川河口、魚崎一带にあった美しい松原は、古くから景勝地として知られ、雀の松原と呼ばれていた。魚崎西町の児童公園内には、雀の松原を歌った二つの歌碑がある。

碑面には「竹ならぬかげも雀のやどりとは、いつなりにけん松原の跡、中納言公尹卿」、右側の小石碑表面には「雀松原遺址、杖とめて千代の古塚とへよかし是や昔の雀松原、平安山田寿房」、裏面には「地主松尾仁兵衛」と刻まれる。この石碑は阪神電鉄開通工事の際、軌道敷内にあつて取り壊された真の旧蹟を惜しんで、地主が所有地を地盛りし若松を植え移転したものである。住吉川の西に西松原、上松原、下松原という字名があつたが新住居表示を実施して消えてしまい、現在では国道四三号線の「松原」交差点に名を残すのみである。



(雀の松原跡碑)

## 「西国街道」

京と大宰府を結ぶ山陽道は、古代から重要な交通路であったが、中世頃よりその一部は西国街道とも呼ばれた。芦屋市東方まで内陸部を進んで来た街道は、これより海岸線沿いを進み、打出で二本に分かれた。国道二号線近くを通る本街道と、国道四三号線沿いを通る浜街道となつて西へのびた。

江戸時代、西国街道の本街道は、大名行列などが通り、一方、浜街道は、庶民の交通路として本街道よりもにぎわっていた。



(浜街道道標)

## 「御影石」

六甲南麓から採れる花崗岩は古くから良質の石材として利用されて来た。

花崗岩一般を御影石と呼ばれるほどに有名である。

主産地の御影・住吉でいつ頃から採石が行われ始めたのかはよくわからないが、豊臣秀吉の大坂城築城（天正十一年）に際しては、付近の山中から石が切り出されている。

京都国立博物館や平安神宮神苑には、「津国御影 天正十七年」と刻まれた橋脚石材が保存されている。

## 「神戸市立御影公会堂」

御影町時代この建物は御影町公会堂として建設された。設計は清水栄二が手がけた。昭和二十年（一九四五年）、三度にわたる神戸大空襲により御影の町は焦土と化し、公会堂も被災した。終戦後、御影町は自力での修復が困難であった為に、神戸市との合併を望み、昭和二五年に合併された。公会堂は神戸市によって改修を受け、昭和二八年（一九五三年）四月から使用再開された。大ホールは約一千人を収容でき、当時は神戸市最大の集会施設であった。

野坂昭如原作「火垂るの墓」で神戸大空襲の際、幼い兄弟が空襲の中逃げて来た川が石屋川であり、一息ついた兄弟が見渡した焼け野原にぼつんとたっていたのが御影公会堂である。現在も残る御影公会堂は阪神大水害、太平洋戦争、阪神・淡路大震災と三つの惨劇を見つづけて来た。



(御影公会堂)



## 「倚松庵」

倚松庵（いししょうあん）は、文豪谷崎潤一郎の旧居。

ここで執筆された代表作にちなんで「細雪」の家とも呼ばれる。

昭和四年（一九二九年）に、当時の武庫郡住吉村反高林（たんだかばやし）に建てられた和風木造建築で、谷崎潤一郎は、一九三六年から一九四三年まで居住した。

平成二年（一九九〇年）に、同じ東灘区内の住吉東町に移築し保存されている。

細雪の評価は高く、谷崎は毎日出版文化賞や朝日文化賞を受賞している。

また、作家の三島由紀夫をはじめ、細雪は作家たちにより多くの文芸随想等で幾度か取り上げて高く評価され、読書アンケートや名著選でも必ず近代文学の代表作に挙げられる。



(倚松庵)

## 灘区の歴史 「桜ヶ丘遺跡」

昭和三九年、桜ヶ丘町で壁土用の土砂を採取中に大・小十四個の銅鐸と七本の銅戈（どうか）が発見され、昭和四五年に国宝に指定された。銅鐸は弥生時代（約一八〇〇年～二〇〇〇年前）につくられた国産の青銅器で、複数の銅鐸が出土したのは当時非常に珍しい発見であった。現在、神戸市立博物館に保存展示されている。

十四個の銅鐸は、流水文（りゅうすいもん）銅鐸や、袈裟襷文（けさだすきもん）銅鐸など、いずれの銅鐸も線描の絵が鑄出されている。

銅戈七本は長さ三十センチ弱でほぼ大きさがそろっており、樋（ひ）を複合鋸歯（きよし）文で飾った大阪湾型銅戈である。

神戸地域で銅戈の出土は非常に珍しく貴重なものである。



(桜ヶ丘遺跡、銅鐸・銅戈)

## 「赤松城跡」

現在の神戸大学の敷地の一部が赤松城跡と言われている。

鎌倉時代末期の元弘三年（一二三三—三四年）、播磨の豪族赤松円心が大塔宮護良親王の命令を受けて兵を挙げ、鎌倉幕府の京都六波羅探題の軍と戦ったことは「太平記」などに詳しく記されている。居城であった上郡の白旗城からこの地に赴き、円心は南朝のために幕軍と戦った。

赤松氏のこの地での奮戦があったからこそ、後醍醐天皇も都へ帰ることがかない、建武新政（建武中興）の基をつくった功績は大きかったのだろう。



（神戸大学敷地内に残る石垣）

## 「水車新田」

六甲登山口からケーブル乗り場へ行く道（神戸大学付近）に音ヶ平という字の地がある。この音ヶ平が後に開発され水車業が盛んになり水車新田村と呼ばれるようになった。

もともと神戸では、どこの川にも水車が設置されていたのどかな風景を見せていた。特に灘区では、河原・五毛・水車新田・篠原などが有名であった。灘区は水車を利用した油製造が盛んであつて、最盛期には一万石もの油を、京都・大坂・江戸へと積出していた。

都賀川上流の傾斜面の川水を利用して、灯油用に菜種を搾る目的での水車業が盛んになったが、一八〇〇年代初頭以降、幕府の統制で原料の菜種の入荷が減ったことや各地に水車業が興ったこともあり、灘の酒造用の米をつくる水車に転換。灘の酒造りに大きな役割を果たした。



大正の末から昭和の初め頃、電気精米、蒸気精米が進むにつれ衰退し、  
今では地名を残すのみとなった。



(水車新田跡)

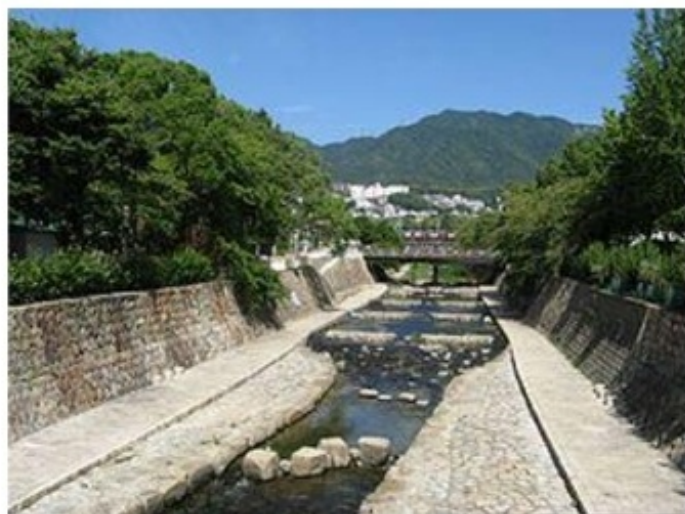
## 「都賀野」

日本書記の仁徳天皇の条および神功皇后の条に、菟餓野（とがの）の名がみえ、撰津国風土記にも刀我野（とがの）の鹿の物語が記載されている。

これら全てが灘の都賀野だとすることはできないが、平清盛の時代には、明確に灘の都賀が出て来る。この都賀は都賀庄と呼ばれた地域のことで、今の灘区内の内、徳井方面を除いた大部分を指し、北は山に連なり摩耶山を含む広大な地域。文禄・慶長に行われた太閤検地以後に村落は独立し、江戸時代に入って都賀庄は解体されて行った。明治二二年に町村制が実施されて、都賀川以西の十カ村合併し都賀野村となった。以東は徳井村を含めて八カ村が六甲村となり、海岸に近い大石村と新在家村は都賀浜村となった。その後、村名の変更があつて、都賀野村は西灘村になり、都賀浜村は西郷町と改められて、昭和四年にこれらの地区は六甲村の一部を除いて、神戸市に編入され



灘区となった。こうして、都賀の地名は区内を流れる都賀川だけに残った。



(都賀川)

## 「神戸市立王子動物園」

一九二八年に、諏訪山公園内に開園した諏訪山動物園（一九四六年閉園）を前身に開園。一九五〇年に湊川公園と王子公園を会場とし開催された日本貿易産業博覧会（通称 神戸博）の跡地を利用して一九五一年三月に現在地に移転開園した関西三大動物園のひとつで、神戸市灘区の王子公園内にある。

ジャイアントパンダ・コアラ・アムールトラ・アムールヒョウ・ユキヒョウなどの希少動物をはじめ多くの動物たちが飼育展示されている。

現在、日本で唯一、ジャイアントパンダとコアラを同時に見ることができ、る動物園である。

園内には、上映設備のある動物科学資料館や遊園地などが設置されているほか、実物の蒸気機関車 D51 が展示保存されている。春には無料で園内の桜を見学できる「夜桜通り抜け」というイベントが行われている。



(パンダ  
コウコウ)

## 「旧ハンター邸」

F.H.ハンター氏は、神戸にゆかりのある人で、天保三年（一八四三年）、英国北アイルランドで生まれ、慶応元年（一八六五年）に横浜へ渡った。

慶応三年十二月、兵庫開港のとき神戸へやって来た貿易商であった。

彼は日本での成功を目指したが、たんなる貿易商ではなく、この地に骨を埋める覚悟で事業を起し努力した人物。妻は日本人女性であった。

明治六年（一八七三年）ハンター商会を設立し、明治十二年大坂安治川河口に大阪鉄工所を創設して、造船や機械製造で事業は発展を続けた。

この大阪鉄工所が今日の日立造船所である。

大正六年（一九一七年）、七五歳で永眠するまで神戸北野に住まいした。

異人館「旧ハンター住宅」（国の重要文化財）が北野町から王子動物園北東隅に移築され、毎年四・八・十月に館内を公開している。



(旧ハンター邸)

## 「六甲山」

六甲山（ろっこうさん）は、兵庫県南東部、神戸市の市街地の西から北にかけて位置する山で、瀬戸内海国立公園の区域に指定されている。

南北に狭く、東西方向に長さ数十キロにわたって市街地の北側直近に迫っており、その山並みは神戸や阪神間、また大阪市内からも天然のランドマークとして機能している。また裏六甲側からの山系も高い山地に遮られないこともあり、三田市や三木市などからも望むことができる。古くから交通路や観光施設の開発が進められ、多くの観光客や登山客を集める。

南西端は塩屋駅付近の明石海峡に程近いあたりで大阪湾に接し、そこから山稜が北東方向に伸びる。山系のほぼ中央に位置する摩耶山で方向を東寄りに変え、東灘区と北区の境界に位置する最高峰を経て宝塚駅の西方に達する。東西方向の長さは三十キロ超であり、南北方向の幅はおおむね五キロメートル

ル未満、最深部の最高峰周辺でも十キロ程度である。

北西に続く丹生山系とともに六甲山地を形成し、西から北方の西半にかけては播磨平野東部の印南野台地、北方の東半には三田盆地が位置する。

また、北東方向に武庫川溪谷をはさんで続く丹波高地（北摂山地）とともに大阪平野の北限をつくっている。

最高峰の西にある灘区六甲山町の六甲有馬ロープウェイ「六甲山頂駅」から摩耶山山頂近くの摩耶ロープウェイ「星の駅」にかけて、多くの文化・保養施設やホテルなどが集まっている。

神戸電鉄有馬線より西側、神戸市長田区・須磨区内に位置する高取山、横尾山（須磨アルプス）、鉢伏山・旗振山（須磨浦公園・須磨浦山上遊園）などは須磨ニュータウンと河川によって主山稜と各個に分断されていることもあり六甲山とは区別される場合もあるが、全山縦走の経路であり、地理上も本山系に含まれる。

六甲山の大部分は、約一億年前（中生代白亜紀）に、地下深くで生まれた花崗岩でできている。第四紀、百万年前以後の六甲変動と呼ばれる地殻変動によって最高部が九〇〇メートル以上に至るまで隆起し、現在も変動を続けている。それによって生じた複数の断層が北東から南西に向かって主稜線と平行に走っている。いずれも北西側が東に向かって動く右横ずれ断層であり、横ずれが起ると同時に北西側が高くなる傾向がある。

これらの断層は阪神淡路大震災の震源断層である野島断層などとともに六甲・淡路島断層帯を構成している。

この地帯は古くから「むこ」の名称で呼ばれ、武庫、務古、牟古、六兒、無古などの字が当てられており、日本書紀神功皇后摂政元年の条には、「務古水門（むこのみなと）」の記載がある。語源については、畿内から見て「むこ」を意味するという説が有力であるが、諸説がある。

「六甲」の字が当てられるのは比較的最近で、元禄時代にできた「摂陽群



談」に見られるのが初期の例であり、享保年間の「撰津志」には「武庫山一名六甲山」の記載が見られる。

現在の六甲山観光は、明治時代以降に神戸外国人居留地の欧米人によって開発されたハイリゾートに始まる。山頂エリアにはイギリス人グルームらにより造成された日本で最初のゴルフ場である神戸ゴルフ倶楽部がある。山頂エリアの山道は、シエール道、シエール槍、アゴニー坂、ダウントリッジ、トウエンテイクロスなど、当時の外国人により命名されたものが現在も使われている。

神戸や大阪など人口の多い都市部に隣接した六甲山の開発は官民が競って争う場となった。また戦前から阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）と阪神電気鉄道は当時からライバル同士であり、この六甲山の開発事業もしのぎを削ることになる。昭和六年（一九三一年）には、阪急系の六甲登山架空索道（ロープウェイ）が先行開業し、翌年の昭和七年には、阪神系の六甲摩耶鉄道六

甲ケーブル線が開業し、六甲山上への観光客の争奪戦が始まることになる。また六甲山上でのバス認可などでも両社の攻防が繰り広げられた。神戸市では、昭和四年、民間からの鉄道やバスなど各種の開発要請のある中、市の背山一帯を理想的の大公園と化する計画をたて、道路整備や公園の整備、山上には植物園や高山植物園などの開発計画を描いた。

戦後、六甲山の復興に重要な役割を果たしたのが阪急電鉄の創業者である小林一三氏であった。小林は持ち前のアイデアを発揮し戦後に荒地となってしまう六甲山復興策を練った上で、兵庫県や神戸市などへ各種の折衝や提案などをしたとされ、今日の六甲山開発の功績者でもある。

## 「近代登山発祥の地」

江戸時代までの登山は、山を御神体として山頂を訪れる信仰登山が多かったが、六甲山にはそのような大きな信仰対象は無かった。しかし山の北側には有馬温泉があり、海岸の漁港から温泉街に新鮮な魚を運ぶための「魚屋道（ととやみち）」が山頂のすぐ横を通っていた。魚屋道の休憩所として山頂近くに「一軒茶屋」があつて、現在でも登山者の憩いの場として営業している。

西洋式の登山としては、一八七四年に、ガウランド、アトキンソン、サトウの三人の外国人パーティが、ピツケルとナーゲルを用いたいわゆる近代登山を日本で初めて六甲山で行った。ガウランドは、一八八一年に槍ヶ岳と前穂高岳に登山して「日本アルプス」を命名した人物で、サトウは富士山に最初に登った外国人としても知られる。

一九一〇年には日本初の社会人山岳会である神戸徒步会が結成された。

また一九四二年にヨーロッパ帰りの藤木九三らによって結成された

ロック・クライミング・クラブ (RCC) は岩山である六甲山を活動の場として、日本の登山界に初めてロッククライミングを紹介する役割を果たした。加藤文太郎も所属した山岳会である。



(一軒茶屋石碑)

## 「西求女塚古墳」

西求女塚古墳（にしもとめづかこふん）は、神戸市灘区にある全長九八メートルを超える大型の前方後方墳である。年代は、古墳時代前期である三世紀後半にあたる。

石室の石材は、地元のものだけでなく、阿波（徳島県）や紀伊（和歌山県）などからも運ばれており、地元の土器は出土しておらず、祭祀に用いられた土師器には山陰系の特徴をもつものが出土していることから、山陰や四国・南近畿などの諸地域と深い交流をもっていたことが推察され、瀬戸内海や大阪湾など水上交通に影響をもつ首長の墳墓であったとも考えられる。

処女塚・東求女塚とともに万葉集や大和物語などに登場する悲恋伝説「菟原処女の伝説」の舞台としても知られている。

処女塚古墳をささんだ東側には東求女塚古墳があり、三つの古墳は海岸線

に沿って一直線に、ほぼ等間隔の距離でならんでいる有名な悲恋物語の古墳の一つである。

三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡なども出土している。



(西求女塚古墳)

## 中央区の歴史 「布引の滝」

布引の滝（ぬのびきのたき）は、神戸の名所の中でも最も広く知られているひとつであろう。昔は市内に有名な滝があり、有馬のような温泉地があることを自慢にしていた。この滝は、六甲山系の瀬池（かわうそいけ）より発し、摩耶山・再度山の谷水を集め南下し巨岩の間から落下している。

布引の滝は、四つの滝の総称であって、日本三大神滝のひとつ。布引滝とも表記する。名瀑として知られる古来からの景勝地である。またかつて役小角（えんのおずぬ・役行者）が開いた滝勝寺の修験道行場として、下界とは一線を画する地であったが、現在は溪流沿いおよび布引山一帯から滝を経て布引ハーブ園へと至る遊歩道が整備され、新神戸駅からも気軽に立ち寄ることができるようになっている。六甲山の麓を流れる生田川の中流（布引溪流）に位置し、上流から順に、雄滝（おんたき）、夫婦滝（めおとだき）、鼓滝（つ

つみだき)、雌滝 (めんたき) からなる。

栃木県日光市の華厳滝、和歌山県那智勝浦町的那智滝とともに三大神滝とされ、日本の滝百選に選ばれている。

平安時代の歌集「伊勢物語」や「栄花物語」をはじめ、古くから宮廷貴族たちが和歌に詠むなど多くの紀行文や詩歌で紹介されている。



(雄滝 おんたき)



## 「六英堂跡」

布野引き丸山（新神戸駅すぐ北）にあった六英堂は、東京丸の内にあった、岩倉具視邸内の一部であった建物を移築したものであった。

岩倉具視が常住していた。明治六年九月、岩倉が欧州視察から帰国した後には、木戸、大久保、伊藤らがしばしば訪れ会合を重ねた。

昭和一六年に、明治天皇は二度、皇后は一度、病氣療養中の岩倉をわざわざお見舞いに来られた由緒ある建物である。

六英とは、岩倉具視、三條実美、木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通、伊藤博文を指し、長く宋の位牌と写真が飾られていた。六英傑と言われる。

岩倉具視が亡くなった後に、私邸は宮内省が宮城前広場整備のため買い上げ取り壊されるが、天皇行幸跡と云うことで、有志者によりこの建物だけは

新宿の国鉄敷地内で保存される。大正十一年には新たな保存先として、川崎造船所の創業者川崎家の神戸市布引の屋敷に引き取られる。初代川崎正蔵は薩摩出身で大久保利通の薫陶も受けていた。甥で養子となる二代川崎芳太郎も薩摩の出で、大久保公の縁の建物という事で引き受けられたようだ。

ここで「六英堂」と名付けられた。

戦後、川崎家の手を離れた布引の敷地に残された六英堂は新たな移転先を探し、昭和五十二年、西宮神社に移築保存された。

木造平屋建て、約二十九・八六坪、十二畳半二間と鞘の間からなる。

建物の解体移築と同時に、六英堂が神戸市布引に在りし昭和十年当時の「史蹟名勝天然記念物保存法」により、史蹟として文部大臣の指定を受けていたことを示す厚板の看板も、現在門内右脇にある石の標柱も移転された。

また、六英傑の額入り写真も保存されている。



(現在の六英堂…西宮神社)

## 「神戸市立南蛮美術館」

神戸市立博物館の前身の一つは神戸市立南蛮美術館である。

この南蛮美術館のさらに前身は、神戸出身の池長孟（いけながはじめ）が、自らの収集品を展示して、昭和一五年に開館した、私立池長美術館であった。池長は育英商業学校（現・私立育英高等学校）の校長を務め、植物学者牧野富太郎に経済的援助を与えたことで知られる富豪である。

彼は昭和時代初期に南蛮紅毛美術の収集を始めた。南蛮美術とは、近世初期、日本へのキリスト教伝来に伴って制作された南蛮屏風、キリシタン絵画等の美術であり、紅毛美術とは、鎖国時代以後、日本が唯一通商関係を保っていたオランダの文物に影響を受けて制作された西洋美術の様式・技法を取り入れた美術作品のことである。彼はこれらの収集品を展示する。

池長美術館を昭和一五年、神戸市葺合区（現・中央区）熊内町に開館したが、

当時は戦時色の濃い時代であり、美術館は数回の展示を行った後、第二次大戦中の昭和十九年に休館。大戦後、コレクションの散逸を恐れた池長は建物とコレクションを神戸市に譲渡した。神戸市ではこれをもとに昭和二十六年、「市立神戸美術館」として開館。「神戸市立南蛮美術館」と改称するのは昭和四十年のことである。長年親しまれた南蛮美術館は神戸市立博物館の開館とともに発展的解消した。旧南蛮美術館の建物は現在神戸市文書館である。



(神戸市文書館…こうべしもんじょかん)

## 「神戸市立外国人墓地」

住所表示だと北区になるのだが、再度山山頂近くにある欧米外国人家族専用の墓地。再度公園の修法ヶ原池の西北に位置し、広大な敷地に、日本人の生活・文化に影響を与えた著名人を含む、世界六十カ国二千六百柱が埋葬されている。ここには堺事件で犠牲になったフランス水兵十一名が埋葬されており、今でも、フランス艦船が神戸港に入港する度に乗組員一同が訪れて祈りを捧げることが知られている。

一八六七年、旧生田川口東岸の小野浜に最初の埋葬が行われた。

一八九九年、小野浜の外国人墓地が閉鎖される。春日野（中央区籠池通）に外国人墓地が設けられる一九五四年、春日野墓地が閉鎖され、一九六〇年、現在の地への移転が始まる。一九六一年、現在地に移転が完了した。墓地は立ち入り禁止だが、展望台への立入は自由である。

神戸に居留地が設定された時の条約によって、明治二年兵庫県は、約二千二百坪を外国人共同墓地として開いた。明治三二年に神戸市が引き継ぐことになった。小野浜には余地がなくなったので、春日野にも外国人共同墓地を増やした。ところがその後、小野浜は神戸のビジネスセンターの中心となり、神聖にして静かに霊の眠るところとしては、ふさわしくなくなったので、各国関係政府の了承を得て、昭和二七年に再度山修法ヶ原へ移設された。

慶応四年（一八六八年）明治元年）二月、泉州堺でフランス人水平と土佐藩主の衝突事件がおこり、十一名のフランス水兵が殺された。その責めを負って十一名の土佐藩主が妙国寺で切腹した。宝珠院に切腹した土佐藩士十一名の墓がある。

フランス人水平十一名の墓は小野浜から現在の地へ移された。

当時フランス軍艦デュプレクス号は神戸に停泊し、堺へ測量に行った時の出来事で、外交史上同年正月の神戸事件とともに有名である。

三ノ宮駅から市バスで「森林植物園」か「再度山」行バス三〇分、「再度公園」下車徒歩三分（冬季運休）



（神戸市立外国人墓地）



## 「神戸事件」

神戸事件は、慶応四年一月十一日（一八六八年・明治元年）三宮神社前において備前藩（現・岡山県）の兵が、隊列を横切ろうとしたフランス人水兵らを負傷させたうえ、居留地の予定地を検分中の欧米諸国公使らに水平射撃を加えた事件である。明治政府初の外交問題となった。

この事件により、一時、外国軍が神戸中心部を占拠するに至るなどの動きにまで発展したが、その際に問題を起こした隊の責任者であった滝善三郎が切腹する事で一応の解決を見た事件。

慶応四年一月に、戊辰戦争が始まった。間も無く、徳川方の尼崎藩を牽制するため、明治新政府は備前藩に摂津西宮の警備を命じた。備前藩では一月五日に兵を出立させた。このうち家老・日置帯刀（へきたてわき）率いる八百人は大砲を伴って陸路を進んだ。

この際、慶応三年の兵庫開港に伴い、大名行列と外国人の衝突を避けるために徳川幕府によって作られた「徳川道」を通らずに西国街道を進んでしまった。一月十一日昼過ぎに、備前藩の隊列が神戸三宮神社近くに差しかけた時に、付近の建物から出てきたフランス人水兵二人が隊列を横切ろうとした。これは日本側から見ると武家諸法度に定められた「供割」（ともわり）と呼ばれる非常に無礼な行為で、これを見た第三砲兵隊長・滝善三郎正信が槍を持って制止に入った。しかし、言葉が通じず、強引に隊列を横切ろうとする水兵に対し、滝が槍で突きかかり軽傷を負わせてしまった。

薩英戦争にまで至った生麦事件の二の舞を避けるために、徳川幕府は「徳川道」（大名道）と呼ばれる街道を整備した。

その道筋は、西から、大蔵谷で街道と分かれて北に入り、高塚山を通過して、白川から藍那へ抜け東へ向かい、西小部から有馬街道を越えて、森林植物園

を東へ、摩耶山の北を進み柚谷峠（そまだに）を下り篠原を経て御影に出るという大迂回路であって実際にはほとんど使われずに直ぐに廃道となった。備前藩の隊列がこの道を通る可能性は低かったと考えざる負えない道である。



（神戸事件碑…三宮神社）

## 「北野異人館街」

慶応三年、諸外国に兵庫港を開いてしばらくして、外国人が居留地に近く優れた住環境を求めてこの地に居住するようになった。明治二十年頃から本格的な外国人住宅地として発展し、通称「異人館」と呼ばれる洋風住宅と和風住宅が混在した、神戸独自の異国情緒あふれる豊かな住宅街が形成されていった。

異人館の保存・活用が本格化したのは一九七〇年代以降のことである。住民や商業者が協力し、界隈の道に愛称を公募し、北野坂・ハンター坂・不動坂・北野通りなどの名が付けられた。これがきっかけで街路整備から異人館や景観の保全活動へと進んでいき、市が風見鶏の館や萌黄(もえぎ)の館を借り上げて公開したことをはじめ、昭和五五年(一九八〇年)には文化財保護法による伝統的建造物群保存地区の指定を受け、保存・修理に取り組むように

なった。さらには遊歩道の整備、シテイループの運行など、建物だけでなく、街全体の観光地化が進んでいった。

北野界限のもうひとつの楽しみが、異国料理の食べ歩き。神戸には三十カ国以上の異国料理店があるが、中でもこの界限には中国、フランス、イタリア、スイス、インドなどの各国料理の店が多く、開港以来この地に住んだ外国人のために外国人シェフが広めたという伝統の味が楽しめる。

さらに秋にはジャズストリートの聞き歩きが楽しめる。毎年十月、内外のジャズ・メンがつどい、街中にジャズの音色が響く。遠くからジャズファンが詰めかけ、まちは賑わう。

異人館街は非常に神戸の雰囲気とマッチし、神戸を代表する観光地となっている。

北野町の町名は、山麓にある北野天満神社から起った。



(北野通り  
異人館街)

## 「神戸電信発祥の地」

明治三年、この所に神戸伝信機局が置かれ八月二十日大阪との間に始めて通信が行われました。開局三十周年を記念して石碑が建てられた。

(神戸市中央区新港町、国道二号線 京橋交差点南東)



(神戸電信発祥の地碑)

## 「神戸海軍操練所」

神戸海軍操練所は、元治元年（一八六四年）五月に、軍艦奉行の勝海舟の建言により幕府が神戸に設置した海軍士官養成機関、海軍工廠（こうしょう）である。現在の神戸市中央区新港町周辺にあった。京橋筋南詰には神戸海軍操練所跡碑がある。

明治維新の中心人物として幕末の志士たちに大きな影響を与えた勝海舟は、神戸を拠点に壮大な構想を実現させようとした。文久三年（一八六三年）、鎖国政策の崩壊により海防の必要性が高まっていた折、勝海舟は神戸に海軍操練所の設立を提案した。これは海軍兵学校と海軍機関学校を兼ねたものであり、日本に欧米と肩を並べる海軍を建設するための足がかりを作ろうとしたのであった。翌年の、元治元年から勝は生徒の募集をはじめるが、幕府に反対する者でも入所を認めたことが大問題となり、わずか一年で操練所は閉鎖



されてしまう。操練所の開所期間は非常に短かったものの、その間に坂本龍馬・陸奥宗光（むつむねみつ）など新しい時代を担う人々を育て、日本の海軍の歴史にも大きな足跡を残した。この時に坂本竜馬が神戸に来たかどうかは定かではない。

海軍操練所跡は現在の中央区新港町にあり、錨（いかり）の形をした記念碑が建てられている。（神戸電信発祥の地碑の隣）



(神戸海軍操練所跡碑)

## 「日本マラソン発祥の地」

明治四二年（一九〇九年）三月二一日、神戸の湊川埋め立て地から大阪の西成大橋までの三一・七キロの「マラソン大競争」が行われた。

日本で「マラソン」という名称を使ったのは、この大会が初めてと言われる。参加申込者は四百人以上にのぼり、体格試験によって百二十人にしぼりこまれた。鳴尾競馬場で予選が実施され、出場選手二十人が決まり開催。

一位は、岡山県在郷軍人の金子長之助選手で、御影付近で、わらじの緒が切れるアクシデントがあつたが、脱ぎ捨てて走り続け優勝した。

神戸マラソンのスタート地点でもある神戸市役所前に、「日本マラソン発祥の地 神戸」の記念碑が建てられた。

日本で初めて 組織的に記録を競う形式の競走を行ったということとで、「日本マラソン発祥の地」とされている。



(日本マラソン発祥の地 神戸の記念碑)

## 「生田神社」

神功皇后の三韓外征の帰途、神戸港で船が進まなくなった為神占を行った所、稚日女尊が現れ「吾は活田長峽国に居らむと海上五十狭茅に命じて生田の地に祭らしめ。(私はいくたのながさの国に居りたいのです。うなかみのいそさちに命じて生田の土地に祀らせて欲しい)との神託があつたと日本書紀に記されている。

当初は、現在の新神戸駅の奥にある布引山「砂山」(いさごやま)に祀られていた。延暦十八年(七九九年)の大洪水により砂山の麓が崩れ、山全体が崩壊するおそれがあつたため、村人の刀祢七太夫が祠から御神体を持ち帰り、その後到现在地にある生田の森に移転したと伝わる。

平城天皇、大同元年(八〇六年)に「生田の神封四十四戸」と古書には記され、現在の神戸市中央区の一部が社領であつた所から、神地神戸(かんべ)

の神戸（かんべ）がこの地の呼称となり中世には紺戸（こんべ）、近年に神戸（こうべ）と呼ばれるようになった。

神階は貞観元年（八五九年）に従一位まで昇った。延喜式神名帳では「摂津国八部郡 生田神社」と記載され、名神大社に列し、月次・相嘗・新嘗の幣帛に預ると記されている。

社殿は、昭和十三年（一九三八年）の神戸大水害、昭和二十年（一九四五年）の神戸大空襲、平成七年（一九九五年）の阪神・淡路大震災など何度も災害等の被害に遭い、そのつど復興されてきたことから、「蘇る神」としての崇敬も受けるようになっていく。

延暦十八年の大洪水の際、社の周囲には松の木が植えられていたが、全く洪水を防ぐ役割を果たさなかった。その故事から、今でも生田の森には一本も松の木は植えられていない。また過去には能舞台の鏡板にも杉の絵が描かれ、元旦には門松は立てず杉飾りを立てる。



(生田神社)

## 「相樂園」

相樂園は、都市公園・日本庭園。日本の文化財保護法に基づく登録記念物の最初の登録物件である。ツツジの名所として知られる。

三田藩士・小寺泰次郎が幕末から明治維新の混乱で困窮する三田藩の財政を立て直すべく、九鬼隆義、白洲退蔵（白洲次郎の祖父）らとともに神戸で事業を起こし実業家として成功を収め、小寺の私邸として建設されたもので、一八八五年頃から築造を始め一九一一年に完成させた広大な庭園と邸宅である。当初「蘇鉄園」と呼ばれていたが一九四一年に神戸市が譲り受け、名称を中国易経にある「和悦相楽」より取った「相樂園」と変えて一般公開されるようになった。

庭園の形式は池泉回遊式（ちせんかいゆうしき）を基本としているが、西洋文化の影響をうけて広場が設けられている。



戦前までは園内に小寺家本邸をはじめとする多数の建造物があった。しかし西洋風の旧小寺家厩舎（重要文化財）以外は全て一九四五年六月の神戸大空襲により焼失した。現存する大楠や蘇鉄林、大灯籠、塀、門などから失われた邸宅の雄大さをうかがうことができる。

第二次大戦後になって神戸市生田区（現・中央区）北野町から旧ハッサム住宅（重要文化財）が移築保存され、神戸市の迎賓館施設として相楽園会館、茶室「浣心亭」が建設され、さらに神戸市垂水区から船屋形（重要文化財）が移設されて現在の景観に至る。

小寺泰次郎の長男である、小寺謙吉はここで生まれ育った。

第十一代神戸市長であった彼は、三田学園の創設者でもある。

昭和十六年（一九四一年）三月に神戸市が譲り受け公園として整備した。



(相楽園 日本庭園)

## 「花隈城址」

花隈城は元は花熊城と書いた。永禄十一年（一五六八年）、織田信長の命令によつて、摂津の荒木村重が一年で築いたといわれる。信長が尾張から起つて国家統一の志を持つて京都に入り中国地方をも平定する足掛かりとするためであつた。城の地点は、神戸の海にのぞんで突き出た大地で、海陸の要害地を占めていた。

城の規模は、本丸、二の丸、三の丸があり、天守閣を備え、櫓（やぐら）もあり、本丸の周囲と二の丸、三の丸合わせた周囲とに堀があり、近世城郭の形態を完備して威容を示していた。

荒木村重は、その後、石山本願寺（大坂本願寺）の宗徒と呼応して信長に反抗したため、信長は池田信輝（恒興）らに花隈城を攻めさせた。信輝らは一挙に攻めるのは不利と見て、生田の森、諏訪山、大倉山などの要所に砦を

構えて、ゆっくりと攻めかけた。天正八年（一五八〇年）閏三月二日から初めて七月二日について落城させたのである。

落城後に信輝は、この城の材料の一部を利用して兵庫城を築き、一部の石は大坂城を築くときに運ばれたと伝えられている。この付近の土地の字に城に關したなど多くのこっている。城跡一部の花隈公園は戦後荒廢していたが、近年は城跡公園として整備され、その地下に市営駐車場が設けられている。

三木合戦のおり、別所氏は播磨三木城に籠城し羽柴秀吉軍と対峙していた。荒木村重の領国摂津は、三木城から六甲山地を挟んで南側に位置する。これによって、摂津の港で兵糧を陸揚げ花隈城から丹羽山を越え三木城へという新たな補給路ができた。

秀吉の部将黒田孝高が説得に向かったが、村重に捕らえられ有岡城に幽閉された。

花隈城も四ヵ月ほどで陥落し、毛利からの兵糧も途絶えた三木城は悲惨な結末をむかえることになった。



(花隈城址…花隈公園)



「神戸ふるさと散歩」 東灘区、灘区、中央区編も今後加筆いたします。  
兵庫区、長田区、須磨区、垂水区、北区、西区編は、順次公開いたします  
ので、よろしくお願いいたします。

尚、記載してある数値などは、二〇一二年八月現在のものを採用しました。

本書で使用しました写真は、著者自ら撮影したものと許可を頂きまして掲載したものが大半ですが、一部写真に著作権者が不明なものがございます。お気づきの方が居られましたらお知らせ下さい。掲載許可の承諾を頂ける様に連絡をさせて頂きますのでお知らせ下さい。記述内容につきましては、筆者独自取材のものや過去の刊行物などを参考にいたしましたましたが、誤記などお気付きの点などございましたらお知らせ下さい。



「神戸ふるさと散歩」

岸本善英



# 神戸ふるさと散歩

「東灘区」「灘区」「中央区」「兵庫区」「垂水区」編

## はじめに

神戸という街は、確かに近代的なイメージがある。しかし遥かなる時を超えて築かれて来た歴史がそこには存在する。

今だからこそ、伝統や文化、郷土の歴史を振り返り、滅びていったもの受け継がれたものの大切さを顧みて、いとおしく思う心を大切にしたい。

本書は神戸の史跡散策や心のゆとりの友としてご活用頂ければと思い執筆したものである。

## 「神戸の歴史」

「神戸」(かんべ)神社に付属した民戸」という地名は、現在の三宮・元町周辺が古くから生田神社の神封戸(じんぷこ)の集落であったことに由来する。西国街道の宿場町であり北前船の出発地の一つでもあった兵庫津(ひょうごのつ)に近く、廻船問屋が軒を並べていた神戸村と呼ばれていた。

神戸三社(神戸三大神社)をはじめとする市内にある神社の神事に使うお神酒の生産にも係わり、有馬温泉や神封戸の形成も市名の由来に関係している。遣隋使の時代には、既に港は開かれていたが、平清盛により、経が島の近くの都である福原京が計画された前後に貿易の拠点として整備され、大輪田泊(おおわだのとまり)と呼ばれたことがその発展の始まりとされる。

その後、明治維新に至るまでは「兵庫津」と呼ばれ、京・大坂の外港・経由地として栄えたまちが神戸である。

「神戸ふるさとめぐり」 目次

・神戸九区の成立ち

「東灘」「灘」「中央」「兵庫」「長田」「須磨」「垂水」「北区」「西区」

・東灘区の歴史

「住吉川と水車」「東灘の古墳時代」「東灘と銅鐸文化」「岡本梅林公園」  
「保久良神社」「御影郡家」「石屋川トンネル跡」「本住吉神社」「雀の松原」「西  
国街道」「御影石」「神戸市立御影公会堂」「倚松庵」

・灘区の歴史

「桜ヶ丘遺跡」「赤松城跡」「水車新田」「都賀野」「神戸市立王子動物園」  
「旧ハンター邸」「六甲山」「近代登山発祥の地」「西求女塚古墳」

・中央区の歴史

「布引の滝」「六英堂跡」「神戸市立南蛮美術館」「神戸市立外国人居宅地」  
「神戸事件」「北野異人館街」「神戸電信発祥の地」「神戸海軍操練所」  
「日本マラソン発祥の地」「生田神社」「相楽園」「花隈城址」

・兵庫区の歴史

「会下山」「湊川合戦陣所跡」「湊川神社」「柳原のえべっさん」

・垂水区の歴史

「舞子お台場」

## 神戸九区の成立

### 「東灘区」

東灘区は、芦屋市に隣接する神戸の東端である。

西に灘区、北に北区と接している。神戸市第二の海上都市である「六甲アイランド」は、東灘区内に属する。

本来はこの辺りが古来より灘と呼ばれた地域の中心地域であったが、神戸市に編入される時点では既に灘区は存在しており市長裁定で東灘区と言う名称に決まった。(一九五〇年・昭和二五年)

昭和六三年(一九八八年)、神戸市第二の人口島「六甲アイランド」が完成し東灘区となった。灘五郷の中心地である。

人口は約二十一万二千人

## 「灘区」

昭和四年（一九二九年）に六甲村 西灘村 西郷町が神戸市に編入され、昭和六年（一九三一年）には、神戸市の行政区設置に伴い灘区が誕生した。

ちなみに、国鉄「灘駅」の開業はこれより古く、大正六年（一九一七年）十二月に行われたが、現在の灘駅とは場所が異なる。摩耶ケーブルの開業も古く大正十四年（一九二五年）一月のことである。

人口は約十三万四千人。

## 「中央区」

明治十二年（一八七九年）に、八部郡神戸村、兵庫村、坂本村が合併して地方自治体である神戸区が発足した。（この区は行政区ではない）

大日本帝国憲法が公布される前年の、明治二十二年（一八八九年）に、菟原郡葺合村、八部郡荒田村（兵庫区）を併合。市制を施行し神戸市となる。

昭和五五年（一九八〇年）に、葺合区と生田区を統合して中央区を設置。人口は約十二万八千人。

三宮、異人館が並ぶ重要伝統的建造物群保存地区の北野町山本通。

有名な旧居留地、中華街の南京町、メリケンパーク、神戸ハーバーランド、ポートアイランド、神戸空港（マリニエア）、東部新都心のHAT神戸などがある。まさに神戸の中心地である。



## 「兵庫区」

昭和二十年（一九四五年）、行政区を再編成。湊区を合併し、湊東区の荒田地区、林田区の御崎・和田・吉田地区を編入。昭和二十二年（一九四七年）、武庫郡山田村、有馬郡有馬町、有野村を兵庫区に編入。昭和二十六年（一九五一年）、有馬郡道場村、八多村、大沢村を兵庫区に編入。昭和三〇年（一九五五年）、有馬郡長尾村を兵庫区に編入。昭和三三年（一九五八年）、美囊郡淡河村を兵庫区に編入。昭和四八年（一九七三年）、兵庫区の北部を北区に分割。現在の兵庫区となる。

人口は約十万七千五百人。

雪見御所（ゆきみのごしよ）は、平安時代末期に摂津国福原京（現兵庫県神戸市兵庫区雪御所町）にあった平清盛の邸宅。

## 「長田区」

明治二九年（一八九六年）、八部郡林田村、須磨村大字池田を編入し、両地域を以って林田区を設置。昭和二十年（一九四五年）、行政区の再編成を実施し、従来の林田区を基礎として長田区が誕生。この時、吉田・御崎・和田地区一帯が兵庫区に、常盤町・千歳町・大池町が須磨区に編入され、代わりに須磨区から西代地区を編入し現在の長田区となった。

人口約十万人

長田の歴史は古く弥生時代まで遡ることができ、駒ヶ林の浜は神戸港発祥の地とも言われる。

人々の暮らしは、長田神社を中心とする地域から発展して来た。

長田区内からは高取山がよく見える。

## 「須磨区」

明治二二年（一八八九年）、須磨村が誕生する。明治四五年（一九一二年）、須磨町へと改称する。大正九年（一九二〇年）、神戸市に編入される。

昭和六年（一九三一年）、須磨区が誕生する。  
人口約十六万六千人。

古くから有名な地域で、平安時代にも多くの歌に詠まれている。

一ノ谷の古戦場もあり、須磨海岸は古来より白砂青松の美しい砂浜を持つ海岸として有名で、現在は阪神間随一の海水浴場である。

須磨区と垂水区の間にある境川を境界線にして、東が摂津の国、西が播磨の国となっていた。

## 「垂水区」

江戸時代は明石郡の塩屋、下畑、東垂水、西垂水、東名、西名、滑、中山、奥畑、山田（西舞子）、多聞（本多聞）の各村であった。後に、東名、西名、滑、中山、奥畑の五村が合併して名谷村（名谷町）となった。

明治四年七月（一八七一年）、廢藩置県により明石県の一部となる。

明治四年十一月（一八七一年）、明石県は姫路県に編入し飾磨県に改名。

明治九年（一八七六年）、飾磨県は兵庫県に合併

明治二二年（一八八九年）、町村制施行により、明石郡垂水村となる

昭和三年（一九二八年）、町制を施行し、明石郡垂水町となる

昭和一六年（一九四一年）、神戸市に合併、須磨区の一部となる

昭和二二年（一九四六年）、須磨区から独立して垂水区となる

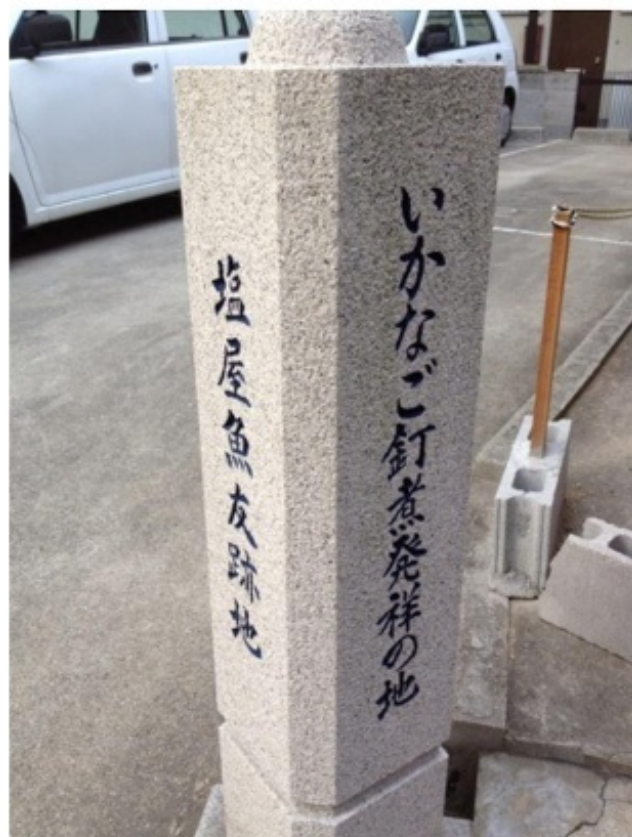
昭和二二年（一九四七年）、明石郡伊川谷・櫛谷・押部谷・玉津・平野・神出・岩岡の各村を編入

昭和五二年（一九七七年）、東北部の須磨ニュータウン西部区域（名谷団地）を須磨区に割譲

昭和五七年（一九八二年）、昭和二二年に編入した地域を西区として分離し現在の垂水区となる。

人口約二十二万人。

淡路島や播磨地区から神戸市にかけて、「いかなごの釘煮」という郷土料理があるが、発祥の地は垂水区塩屋町である。



(塩屋駅前魚友跡地碑)

## 「北区」

昭和二二年（一九四七年）、武庫郡山田村と有馬郡有馬町・有野村を兵庫区に編入。昭和二六年（一九五一年）、有馬郡道場村・八多村・大沢村を兵庫区に編入。昭和三十年（一九五五年）、有馬郡長尾村を兵庫区に編入。昭和三三年（一九七三年）、美囊郡淡河村を兵庫区に編入。

昭和四八年（一九七三年）、兵庫区から分区され、北区が誕生

神戸市中心部が人口収納能力に限界に達した為に、後背地を合併して兵庫区に編入された。昭和四八年（一九七三年）に兵庫区から人口増加の為に分区され北区となった。分区当初の人口は、十一万六千七百三十九人であったが、宅地開発の進展により現在では約二倍に達し、神戸市では西区に次いで二番目に人口が多い。人口約二十二万六千人。

面積は神戸市全体の約四四%を占めている。

日本の名湯である有馬温泉を区内に抱え、名所旧跡などが多く点在し神戸市内有数の観光地としての魅力も大きい。



(有馬温泉街)



## 「西区」

明治四年七月（一八七一年）、廢藩置県により明石県の一部となる。

明治四年十一月（一八七一年）、明石県は姫路県に編入し飾磨県に改名。

明治九年（一八七六年）、飾磨県は兵庫県に合併

明治二二年（一八八九年）、町村制施行により、明石郡伊川谷村、櫛谷村、玉津村、平野村、押部谷村、神出村、岩岡村が成立した。

昭和二二年（一九四七年）、神戸市垂水区に編入され西区となる。  
人口約二五万人

垂水区と同様に明石郡に属していた地域で、隣接する明石市とも結びつきが強いが、かつては田園地帯・公共交通の空白地域であった。一九七〇年頃から、神戸市中心部のベッドタウンとして開発が進み、西神ニュータウンや

押部谷地域・玉津地域を中心に大きく様変わりし、同時に公共交通の計画をした区である。神戸市の新たな文化、現在のところ神戸市九区で最も人口が多く、市の三割近くを面積を当区が占める。昭和五七年（一九八二年）に垂水区から分区した。神戸市で一番新しい行政区であり、神戸市の西側に位置することから西神と呼ばれる。

この地域はの歴史も古く旧石器時代の遺物も出土している。明石川と伊川が合流する地点の北側で「新方遺跡」（しんぽういせき…玉津町新方）が発見された。旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺構遺物が確認されているが、弥生人集落跡の墓に矢じりの刺さったままの縄文人の遺骨が丁重に葬られていた。これは、戦いの証であるが、畏敬の念を感じるもので文化的にも高かったのではないだろうか。西区は農村としての面と近代工業地域としての面、そしてベッドタウンとしての面も持つ神戸九区の中では特異な存在である。

## 東灘区の歴史 「住吉川と水車」

六甲山麓の南には大河や大きな湖がない。瀬戸内海式気候である地域で水資源を確保する事は農業を行ううえで死活問題である。八月に降水量は極端に減るので、中小河川は重要な水源となる。古代では雨乞いの神事や祈禱が行われ、河川の分水嶺地では水争いが絶えなかった。

六甲山系から流れ出る河川は急流であった為に、古くから水車が多く設置され動力として活用された。大きな水力を得る事ができるので大正時代の全盛期には、住吉川沿いに軒を並べた水車場は、約八〇箇所にも及び一万個の石臼が据えられていた。

しかしその後、電力の普及で水車は急速に姿を消す事となった。

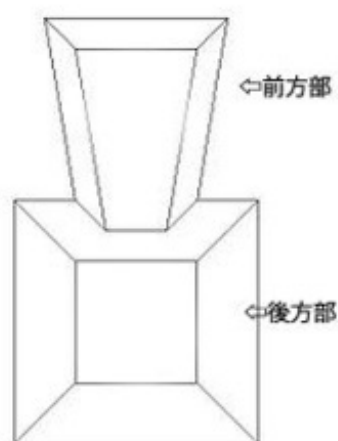
どうだろう、今の時代こそ水車の様な動力が復活すべきであって、自然の恵みである河川の水力で発電する様な仕組みは神戸にこそ相応しく思う。

## 「東灘の古墳時代」

東灘区では幾つかの古墳が見つかっている。

処女塚古墳（おとめづかこふん）は、全長約七十Mの前方後方墳である。

長らく前方後円墳と考えられて来たが、近年の調査で前方後方墳である事が確認された。



（前方後方墳）

処女塚古墳は、四世紀前半の築造と推定されている。

西に少し行くと、西求女塚古墳（にしもとめづかこふん…三世紀後半）があり、東側には、東求女塚古墳（ひがしもとめづかこふん…四世紀後半）がある。約二キロ間隔で並ぶこの古墳群は、万葉集や大和物語などに記されていて、地域に伝説を残している。海岸線に並ぶ姿は雄大であつたはずで、古代では、海路に行く人も陸路に行く人にも三つが並びそびえる景色は脳裏に焼きついたであろう。

考古学的には、前方後方墳である処女塚古墳や西求女塚古墳と前方後円墳である東求女塚古墳では、その成り立ちや政治的背景は異なると思うが、伝説にある様な三人の悲恋物語を築造の伝承と考えるのもロマン的なイメージの神戸に相応しいのかも知れない。

## 「東灘と銅鐸文化」

昭和九年、住吉町渦ヶ森の山中で道路工事中に銅鐸が発見された。



（銅鐸出土記念碑）

東灘区では、本山北町、本山南町や森北町からも銅鐸が出土している。

古代二〜三世紀の日本では、銅鐸文化圏と銅剣銅矛文化圏とに大きく分かれていた。九州を中心に栄えていた銅剣銅矛文化圏に対して、近畿地方を中心としていたのが銅鐸文化圏である。銅鐸文化が滅んだ後に古墳時代が始まるので、この時に大王が交代したか、祭事や神事を中心が代わったかのどちらかだろう。銅鐸の一部には明らかに壊されてから埋められた物もあるが、多くの場合は入れ子状態など大切に埋葬されたかの様に発見されることが多い。この時代に神戸でも何かが起こり常識が覆されたのだろう。前方後方墳を築造していた勢力と後に前方後円墳を築造する勢力の間にも権力争いがあったのではないだろうか。前方後円墳が主流となっていくと大和王権の勢力が全国へ拡大して行くこととなる。古墳時代の祭器としては鏡が使われたのではないだろうか、古墳から発見される副葬品としては鏡が非常に多い。

## 「岡本梅林公園」

神戸市都市公園条例による公園の正式名称は「岡本公園」であるが、一般には「岡本梅林公園」とも呼ばれている。一九八二年に完成した。

岡本の梅林の歴史は古く、山本梅岳の「岡本梅林記」には、羽柴秀吉が岡本の梅林を通過したことが記されているなど、かなり昔から存在していたようである。寛政十年（一七九八年）には、「摂津名所図会」に岡本梅林の図が登場するほど盛んであった。「梅は岡本、桜は生田」と言われた。

現在の岡本梅林と保久良神社境内にある保久良梅林は、神戸市と地元市民により昭和四十年代から五十年代にかけて岡本梅林の一部を復活整備したものである。

この梅林地帯は、古代の遺跡跡であって、石器土器などが多く発見された。古墳も非常に多く発見された地である。





(岡本の梅林公園)

## 「保久良神社」

祭神は、須佐之男命（すさのおのみこと）、大国主命、大歳御祖神（おおとしみおやのかみ）、椎根津彦命（しいねつひこのみこと）を祀る。金鳥山の南面に位置し古生層の上にある。付近では古代の祭祀遺跡が多く見つかっていて、弥生式土器や石器、珍しい銅戈（どうか）なども発掘されている。

本殿周辺には、磐境（いわさか）と思われる様な巨石が点在し、日本庭園の源流とも言われる。本社は延喜式内の古社で、「灘の一つ火」として知られている常夜燈は、大阪湾を望み沖に行く船の標識となっていた。

鷺の宮八幡神社は、保久良神社の里宮ともいわれる末社で、五月の宵宮では、各地域からだんじりが繰り出されて宮入りが行われる。なお、境内の樺（けやき）の大木は神戸の名木になっている。



保久良神社鳥居



鷺の宮八幡神社の檜

## 「御影郡家」

御影には郡家という名の村があった。周辺地域には、室内、堂本、古寺、宮守堂、新堂、寺前などの字があった。南には古社の本住吉神社があり、郡衙（ぐんが）も室内にあることから、この辺りが律令制の成立後に摂津国西部に置かれた、菟原郡（うばらのこおり、うはらぐん）の郡衙の地だと考えられる。

昭和五五年に調査が行われ、掘型一辺が一メートルもある堀立柱建物址が発見されている。付近かえらは奈良時代の須恵器・土師器などが出土している。

郡家とは律令制における郡を治める役場である郡衙の事であり、すなわちこの地に菟原郡の郡衙があったと考えて間違いないだろう。

## 「石屋川トンネル跡」

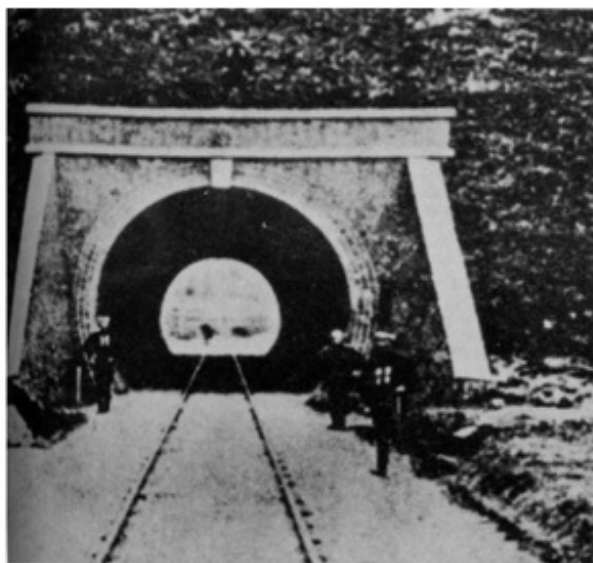
明治七年に、神戸と大阪を結ぶ鉄道が開通した。東京・横浜間に続いての開通で、三宮・住吉・西宮・神崎に駅が設けられた。

当初は、人が集中している海岸地帯に路線は計画されたが、酒造会社などの反対に合い山麓側を通る路線へと変更を余儀なくされた。当時の汽車は石炭の煙を出すので仕方がなかったのだろう。

しかし工事は難航した。石屋川・住吉川・芦屋川があり、困難な川底トンネルを掘らねばならなかった。石屋川トンネルは、外国人技師の協力によって、明治三年十月より始められた工事は、たった九ヶ月で完成した。

この石屋川トンネルは、日本最初の鉄道トンネルである。大正八年には複雑な線化に対応するための工事が行われ、この時にトンネルは解体されて水路橋となった。昭和五十一年には高架化のため、石屋川の地盤強度を高める必要か

ら埋め立てられた。現在、石屋川公園にトンネルがあったことを示す説明板が置かれている。



(石屋川トンネル)

## 「本住吉神社」

底筒男命（うわつつのおのみこと）・中筒男命（なかつつのおのみこと）・表筒男命（うわつつのおのみこと）「住吉三神」および神功皇后を主祭神として祀る。

住吉は「すみよし」は、元は「すみのえ」と読んだ。住吉の「吉」は古来では「エ」と読み、「住」（スミ）と「吉」（エ）の間に助詞の「ノ」を入れて、「住吉」は「スミノエ」と読んだが、平安時代の頃から「スミヨシ」と読むようになった。スミノエとは「澄んだ入り江」のことであり、澄江、清江とも書いた。

社伝では、日本書紀において、神功皇后の三韓征伐からの帰途に船が進まなくなり、神託により住吉三神を祀ったと記される「大津渟中倉之長峽（お

おつのぬなくらのながお)の地が当地であり、当社が住吉三神鎮祭の根源であると伝え、そのために古くから「本住吉」と呼ばれるとしている。

元弘、建武の時代に戦乱が続き神領は荒れひどく衰えたが、足利將軍治世になってからは復興した。

神戸で最もだんじりが盛んな地域で、古代から明治維新直後まで、この辺りは「兎原郡山路庄」と呼ばれていた。本住吉神社は、山路庄七箇村、住吉・野寄・岡本・西青木・横屋・田中・魚崎の総社として祀られていたが、明治から昭和初期にかけて横屋・田中・魚崎の三地区が氏子別れし、各地でお祭りをするようになった。野寄地区・岡本地区・西青木地区は現在も本住吉神社の氏子で、野寄地区・岡本地区・西青木地区と旧氏子の横屋地区の四地区が、五日本宮の昼間に本住吉神社に宮入を行なう。





(本住吉神社)

## 「雀の松原」

住吉川河口、魚崎一带にあった美しい松原は、古くから景勝地として知られ、雀の松原と呼ばれていた。魚崎西町の児童公園内には、雀の松原を歌った二つの歌碑がある。

碑面には「竹ならぬかげも雀のやどりとは、いつなりにけん松原の跡、中納言公尹卿」、右側の小石碑表面には「雀松原遺址、杖とめて千代の古塚とへよかし是や昔の雀松原、平安山田寿房」、裏面には「地主松尾仁兵衛」と刻まれる。この石碑は阪神電鉄開通工事の際、軌道敷内にあつて取り壊された真の旧蹟を惜しんで、地主が所有地を地盛りし若松を植え移転したものである。住吉川の西に西松原、上松原、下松原という字名があつたが新住居表示を実施して消えてしまい、現在では国道四三号線の「松原」交差点に名を残すのみである。



(雀の松原跡碑)

## 「西国街道」

京と大宰府を結ぶ山陽道は、古代から重要な交通路であったが、中世頃よりその一部は西国街道とも呼ばれた。芦屋市東方まで内陸部を進んで来た街道は、これより海岸線沿いを進み、打出で二本に分かれた。国道二号線近くを通る本街道と、国道四三号線沿いを通る浜街道となつて西へのびた。

江戸時代、西国街道の本街道は、大名行列などが通り、一方、浜街道は、庶民の交通路として本街道よりもにぎわっていた。



(浜街道道標)

## 「御影石」

六甲南麓から採れる花崗岩は古くから良質の石材として利用されて来た。

花崗岩一般を御影石と呼ばれるほどに有名である。

主産地の御影・住吉でいつ頃から採石が行われ始めたのかはよくわからないが、豊臣秀吉の大坂城築城（天正十一年）に際しては、付近の山中から石が切り出されている。

京都国立博物館や平安神宮神苑には、「津国御影 天正十七年」と刻まれた橋脚石材が保存されている。

## 「神戸市立御影公会堂」

御影町時代この建物は御影町公会堂として建設された。設計は清水栄二が手がけた。昭和二十年（一九四五年）、三度にわたる神戸大空襲により御影の町は焦土と化し、公会堂も被災した。終戦後、御影町は自力での修復が困難であった為に、神戸市との合併を望み、昭和二五年に合併された。公会堂は神戸市によって改修を受け、昭和二八年（一九五三年）四月から使用再開された。大ホールは約一千人を収容でき、当時は神戸市最大の集会施設であった。

野坂昭如原作「火垂るの墓」で神戸大空襲の際、幼い兄弟が空襲の中逃げて来た川が石屋川であり、一息ついた兄弟が見渡した焼け野原にぼつんとたっていたのが御影公会堂である。現在も残る御影公会堂は阪神大水害、太平洋戦争、阪神・淡路大震災と三つの惨劇を見つづけて来た。



(御影公会堂)

## 「倚松庵」

倚松庵（いししょうあん）は、文豪谷崎潤一郎の旧居。

ここで執筆された代表作にちなんで「細雪」の家とも呼ばれる。

昭和四年（一九二九年）に、当時の武庫郡住吉村反高林（たんだかばやし）に建てられた和風木造建築で、谷崎潤一郎は、一九三六年から一九四三年まで居住した。

平成二年（一九九〇年）に、同じ東灘区内の住吉東町に移築し保存されている。

細雪の評価は高く、谷崎は毎日出版文化賞や朝日文化賞を受賞している。

また、作家の三島由紀夫をはじめ、細雪は作家たちにより多くの文芸随想等で幾度か取り上げて高く評価され、読書アンケートや名著選でも必ず近代文学の代表作に挙げられる。





(倚松庵)

## 灘区の歴史 「桜ヶ丘遺跡」

昭和三九年、桜ヶ丘町で壁土用の土砂を採取中に大・小十四個の銅鐸と七本の銅戈（どうか）が発見され、昭和四五年に国宝に指定された。銅鐸は弥生時代（約一八〇〇年～二〇〇〇年前）につくられた国産の青銅器で、複数の銅鐸が出土したのは当時非常に珍しい発見であった。現在、神戸市立博物館に保存展示されている。

十四個の銅鐸は、流水文（りゅうすいもん）銅鐸や、袈裟襷文（けさだすきもん）銅鐸など、いずれの銅鐸も線描の絵が鑄出されている。

銅戈七本は長さ三十センチ弱でほぼ大きさがそろっており、樋（ひ）を複合鋸歯（きよし）文で飾った大阪湾型銅戈である。

神戸地域で銅戈の出土は非常に珍しく貴重なものである。



(桜ヶ丘遺跡、銅鐸・銅戈)

## 「赤松城跡」

現在の神戸大学の敷地の一部が赤松城跡と言われている。

鎌倉時代末期の元弘三年（一二三三—三四年）、播磨の豪族赤松円心が大塔宮護良親王の命令を受けて兵を挙げ、鎌倉幕府の京都六波羅探題の軍と戦ったことは「太平記」などに詳しく記されている。居城であった上郡の白旗城からこの地に赴き、円心は南朝のために幕軍と戦った。

赤松氏のこの地での奮戦があつたからこそ、後醍醐天皇も都へ帰ることがかない、建武新政（建武中興）の基をつくった功績は大きかつたのだろう。



（神戸大学敷地内に残る石垣）

## 「水車新田」

六甲登山口からケーブル乗り場へ行く道（神戸大学付近）に音ヶ平という字の地がある。この音ヶ平が後に開発され水車業が盛んになり水車新田村と呼ばれるようになった。

もともと神戸では、どこの川にも水車が設置されていたのどかな風景を見せていた。特に灘区では、河原・五毛・水車新田・篠原などが有名であった。灘区は水車を利用した油製造が盛んであつて、最盛期には一万石もの油を、京都・大坂・江戸へと積出していた。

都賀川上流の傾斜面の川水を利用して、灯油用に菜種を搾る目的での水車業が盛んになったが、一八〇〇年代初頭以降、幕府の統制で原料の菜種の入荷が減ったことや各地に水車業が興ったこともあり、灘の酒造用の米をつくる水車に転換。灘の酒造りに大きな役割を果たした。

大正の末から昭和の初め頃、電気精米、蒸気精米が進むにつれ衰退し、  
今では地名を残すのみとなった。



(水車新田跡)

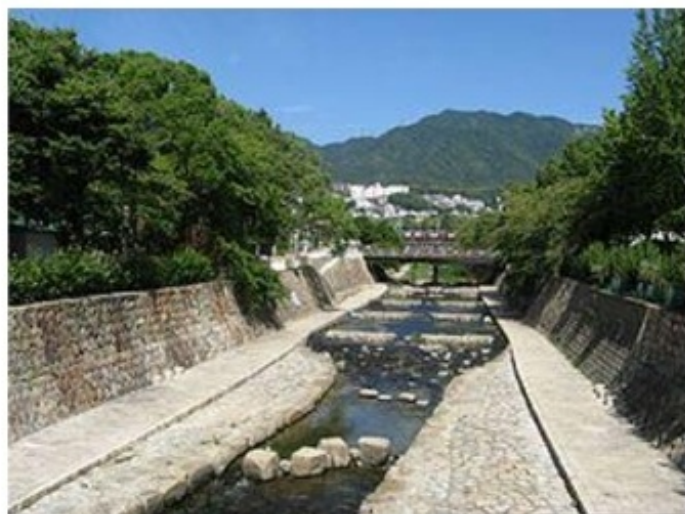


## 「都賀野」

日本書記の仁徳天皇の条および神功皇后の条に、菟餓野（とがの）の名がみえ、撰津国風土記にも刀我野（とがの）の鹿の物語が記載されている。

これら全てが灘の都賀野だとすることはできないが、平清盛の時代には、明確に灘の都賀が出て来る。この都賀は都賀庄と呼ばれた地域のことで、今の灘区内、徳井方面を除いた大部分を指し、北は山に連なり摩耶山を含む広大な地域。文禄・慶長に行われた太閤検地以後に村落は独立し、江戸時代に入って都賀庄は解体されて行った。明治二二年に町村制が実施されて、都賀川以西の十カ村合併し都賀野村となった。以東は徳井村を含めて八カ村が六甲村となり、海岸に近い大石村と新在家村は都賀浜村となった。その後、村名の変更があつて、都賀野村は西灘村になり、都賀浜村は西郷町と改められて、昭和四年にこれらの地区は六甲村の一部を除いて、神戸市に編入され

灘区となった。こうして、都賀の地名は区内を流れる都賀川だけに残った。



(都賀川)



## 「神戸市立王子動物園」

一九二八年に、諏訪山公園内に開園した諏訪山動物園（一九四六年閉園）を前身に開園。一九五〇年に湊川公園と王子公園を会場とし開催された日本貿易産業博覧会（通称 神戸博）の跡地を利用して一九五一年三月に現在地に移転開園した関西三大動物園のひとつで、神戸市灘区の王子公園内にある。

ジャイアントパンダ・コアラ・アムールトラ・アムールヒョウ・ユキヒョウなどの希少動物をはじめ多くの動物たちが飼育展示されている。

現在、日本で唯一、ジャイアントパンダとコアラを同時に見ることができ、る動物園である。

園内には、上映設備のある動物科学資料館や遊園地などが設置されているほか、実物の蒸気機関車 D51 が展示保存されている。春には無料で園内の桜を見学できる「夜桜通り抜け」というイベントが行われている。



(パンダ  
コウコウ)

## 「旧ハンター邸」

F.H.ハンター氏は、神戸にゆかりのある人で、天保三年（一八四三年）、英国北アイルランドで生まれ、慶応元年（一八六五年）に横浜へ渡った。

慶応三年十二月、兵庫開港のとき神戸へやって来た貿易商であった。

彼は日本での成功を目指したが、たんなる貿易商ではなく、この地に骨を埋める覚悟で事業を起し努力した人物。妻は日本人女性であった。

明治六年（一八七三年）ハンター商会を設立し、明治十二年大坂安治川河口に大阪鉄工所を創設して、造船や機械製造で事業は発展を続けた。

この大阪鉄工所が今日の日立造船所である。

大正六年（一九一七年）、七五歳で永眠するまで神戸北野に住まいした。

異人館「旧ハンター住宅」（国の重要文化財）が北野町から王子動物園北東隅に移築され、毎年四・八・十月に館内を公開している。



(旧ハンター邸)

## 「六甲山」

六甲山（ろっこうさん）は、兵庫県南東部、神戸市の市街地の西から北にかけて位置する山で、瀬戸内海国立公園の区域に指定されている。

南北に狭く、東西方向に長さ数十キロにわたって市街地の北側直近に迫っており、その山並みは神戸や阪神間、また大阪市内からも天然のランドマークとして機能している。また裏六甲側からの山系も高い山地に遮られないこともあり、三田市や三木市などからも望むことができる。古くから交通路や観光施設の開発が進められ、多くの観光客や登山客を集める。

南西端は塩屋駅付近の明石海峡に程近いあたりで大阪湾に接し、そこから山稜が北東方向に伸びる。山系のほぼ中央に位置する摩耶山で方向を東寄りに変え、東灘区と北区の境界に位置する最高峰を経て宝塚駅の西方に達する。東西方向の長さは三十キロ超であり、南北方向の幅はおおむね五キロメートル

ル未満、最深部の最高峰周辺でも十キロ程度である。

北西に続く丹生山系とともに六甲山地を形成し、西から北方の西半にかけては播磨平野東部の印南野台地、北方の東半には三田盆地が位置する。

また、北東方向に武庫川溪谷をはさんで続く丹波高地（北摂山地）とともに大阪平野の北限をつくっている。

最高峰の西にある灘区六甲山町の六甲有馬ロープウェイ「六甲山頂駅」から摩耶山山頂近くの摩耶ロープウェイ「星の駅」にかけて、多くの文化・保養施設やホテルなどが集まっている。

神戸電鉄有馬線より西側、神戸市長田区・須磨区内に位置する高取山、横尾山（須磨アルプス）、鉢伏山・旗振山（須磨浦公園・須磨浦山上遊園）などは須磨ニュータウンと河川によって主山稜と各個に分断されていることもあり六甲山とは区別される場合もあるが、全山縦走の経路であり、地理上も本山系に含まれる。

六甲山の大部分は、約一億年前（中生代白亜紀）に、地下深くで生まれた花崗岩でできている。第四紀、百万年前以後の六甲変動と呼ばれる地殻変動によって最高部が九〇〇メートル以上に至るまで隆起し、現在も変動を続けている。それによって生じた複数の断層が北東から南西に向かって主稜線と平行に走っている。いずれも北西側が東に向かって動く右横ずれ断層であり、横ずれが起ると同時に北西側が高くなる傾向がある。

これらの断層は阪神淡路大震災の震源断層である野島断層などとともに六甲・淡路島断層帯を構成している。

この地帯は古くから「むこ」の名称で呼ばれ、武庫、務古、牟古、六兒、無古などの字が当てられており、日本書紀神功皇后摂政元年の条には、「務古水門（むこのみなと）」の記載がある。語源については、畿内から見て「むこ」を意味するという説が有力であるが、諸説がある。

「六甲」の字が当てられるのは比較的最近で、元禄時代にできた「摂陽群

談」に見られるのが初期の例であり、享保年間の「撰津志」には「武庫山一名六甲山」の記載が見られる。

現在の六甲山観光は、明治時代以降に神戸外国人居留地の欧米人によって開発されたハイリゾートに始まる。山頂エリアにはイギリス人グルームらにより造成された日本で最初のゴルフ場である神戸ゴルフ倶楽部がある。山頂エリアの山道は、シエール道、シエール槍、アゴニー坂、ダウントリッジ、トウエンテイクロスなど、当時の外国人により命名されたものが現在も使われている。

神戸や大阪など人口の多い都市部に隣接した六甲山の開発は官民が競って争う場となった。また戦前から阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）と阪神電気鉄道は当時からライバル同士であり、この六甲山の開発事業もしのぎを削ることになる。昭和六年（一九三一年）には、阪急系の六甲登山架空索道（ロプウェイ）が先行開業し、翌年の昭和七年には、阪神系の六甲摩耶鉄道六



甲ケーブル線が開業し、六甲山上への観光客の争奪戦が始まることになる。また六甲山上でのバス認可などでも両社の攻防が繰り広げられた。神戸市では、昭和四年、民間からの鉄道やバスなど各種の開発要請のある中、市の背山一帯を理想的の大公園と化する計画をたて、道路整備や公園の整備、山上には植物園や高山植物園などの開発計画を描いた。

戦後、六甲山の復興に重要な役割を果たのが阪急電鉄の創業者である小林一三氏であった。小林は持ち前のアイデアを発揮し戦後に荒地となってしまう六甲山復興策を練った上で、兵庫県や神戸市などへ各種の折衝や提案などをしたとされ、今日の六甲山開発の功績者でもある。

## 「近代登山発祥の地」

江戸時代までの登山は、山を御神体として山頂を訪れる信仰登山が多かったが、六甲山にはそのような大きな信仰対象は無かった。しかし山の北側には有馬温泉があり、海岸の漁港から温泉街に新鮮な魚を運ぶための「魚屋道（ととやみち）」が山頂のすぐ横を通っていた。魚屋道の休憩所として山頂近くに「一軒茶屋」があつて、現在でも登山者の憩いの場として営業している。

西洋式の登山としては、一八七四年に、ガウランド、アトキンソン、サトウの三人の外国人パーティが、ピツケルとナーゲルを用いたいわゆる近代登山を日本で初めて六甲山で行った。ガウランドは、一八八一年に槍ヶ岳と前穂高岳に登山して「日本アルプス」を命名した人物で、サトウは富士山に最初に登った外国人としても知られる。

一九一〇年には日本初の社会人山岳会である神戸徒步会が結成された。

また一九四二年にヨーロッパ帰りの藤木九三らによって結成された

ロック・クライミング・クラブ (RCC) は岩山である六甲山を活動の場として、日本の登山界に初めてロッククライミングを紹介する役割を果たした。加藤文太郎も所属した山岳会である。



(一軒茶屋石碑)

## 「西求女塚古墳」

西求女塚古墳（にしもとめづかこふん）は、神戸市灘区にある全長九八メートルを超える大型の前方後方墳である。年代は、古墳時代前期である三世紀後半にあたる。

石室の石材は、地元のものだけでなく、阿波（徳島県）や紀伊（和歌山県）などからも運ばれており、地元の土器は出土しておらず、祭祀に用いられた土師器には山陰系の特徴をもつものが出土していることから、山陰や四国・南近畿などの諸地域と深い交流をもっていたことが推察され、瀬戸内海や大阪湾など水上交通に影響をもつ首長の墳墓であったとも考えられる。

処女塚・東求女塚とともに万葉集や大和物語などに登場する悲恋伝説「菟原処女の伝説」の舞台としても知られている。

処女塚古墳をささんだ東側には東求女塚古墳があり、三つの古墳は海岸線

に沿って一直線に、ほぼ等間隔の距離でならんでいる有名な悲恋物語の古墳の一つである。

三角縁神獸鏡や画文帯神獸鏡なども出土している。



(西求女塚古墳)

## 中央区の歴史 「布引の滝」

布引の滝（ぬのびきのたき）は、神戸の名所の中でも最も広く知られているひとつであろう。昔は市内に有名な滝があり、有馬のような温泉地があることを自慢にしていた。この滝は、六甲山系の瀬池（かわうそいけ）より発し、摩耶山・再度山の谷水を集め南下し巨岩の間から落下している。

布引の滝は、四つの滝の総称であって、日本三大神滝のひとつ。布引滝とも表記する。名瀑として知られる古来からの景勝地である。またかつて役小角（えんのおずぬ・役行者）が開いた滝勝寺の修験道行場として、下界とは一線を画する地であったが、現在は溪流沿いおよび布引山一帯から滝を経て布引ハーブ園へと至る遊歩道が整備され、新神戸駅からも気軽に立ち寄ることができるようになっている。六甲山の麓を流れる生田川の中流（布引溪流）に位置し、上流から順に、雄滝（おんたき）、夫婦滝（めおとだき）、鼓滝（つ

つみだき)、雌滝 (めんたき) からなる。

栃木県日光市の華厳滝、和歌山県那智勝浦町的那智滝とともに三大神滝とされ、日本の滝百選に選ばれている。

平安時代の歌集「伊勢物語」や「栄花物語」をはじめ、古くから宮廷貴族たちが和歌に詠むなど多くの紀行文や詩歌で紹介されている。



(雄滝 おんたき)

## 「六英堂跡」

布野引き丸山（新神戸駅すぐ北）にあった六英堂は、東京丸の内にあった、岩倉具視邸内の一部であった建物を移築したものであった。

岩倉具視が常住していた。明治六年九月、岩倉が欧州視察から帰国した後には、木戸、大久保、伊藤らがしばしば訪れ会合を重ねた。

昭和一六年に、明治天皇は二度、皇后は一度、病氣療養中の岩倉をわざわざお見舞いに来られた由緒ある建物である。

六英とは、岩倉具視、三條実美、木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通、伊藤博文を指し、長く宋の位牌と写真が飾られていた。六英傑と言われる。

岩倉具視が亡くなった後に、私邸は宮内省が宮城前広場整備のため買い上げ取り壊されるが、天皇行幸跡と云うことで、有志者によりこの建物だけは



新宿の国鉄敷地内で保存される。大正十一年には新たな保存先として、川崎造船所の創業者川崎家の神戸市布引の屋敷に引き取られる。初代川崎正蔵は薩摩出身で大久保利通の薫陶も受けていた。甥で養子となる二代川崎芳太郎も薩摩の出で、大久保公の縁の建物という事で引き受けられたようだ。

ここで「六英堂」と名付けられた。

戦後、川崎家の手を離れた布引の敷地に残された六英堂は新たな移転先を探し、昭和五十二年、西宮神社に移築保存された。

木造平屋建て、約二十九・八六坪、十二畳半二間と鞘の間からなる。

建物の解体移築と同時に、六英堂が神戸市布引に在りし昭和十年当時の「史蹟名勝天然記念物保存法」により、史蹟として文部大臣の指定を受けていたことを示す厚板の看板も、現在門内右脇にある石の標柱も移転された。

また、六英傑の額入り写真も保存されている。



(現在の六英堂…西宮神社)

## 「神戸市立南蛮美術館」

神戸市立博物館の前身の一つは神戸市立南蛮美術館である。

この南蛮美術館のさらに前身は、神戸出身の池長孟（いけながはじめ）が、自らの収集品を展示して、昭和一五年に開館した、私立池長美術館であった。池長は育英商業学校（現・私立育英高等学校）の校長を務め、植物学者牧野富太郎に経済的援助を与えたことで知られる富豪である。

彼は昭和時代初期に南蛮紅毛美術の収集を始めた。南蛮美術とは、近世初期、日本へのキリスト教伝来に伴って制作された南蛮屏風、キリシタン絵画等の美術であり、紅毛美術とは、鎖国時代以後、日本が唯一通商関係を保っていたオランダの文物に影響を受けて制作された西洋美術の様式・技法を取り入れた美術作品のことである。彼はこれらの収集品を展示する。

池長美術館を昭和一五年、神戸市葺合区（現・中央区）熊内町に開館したが、

当時は戦時色の濃い時代であり、美術館は数回の展示を行った後、第二次大戦中の昭和十九年に休館。大戦後、コレクションの散逸を恐れた池長は建物とコレクションを神戸市に譲渡した。神戸市ではこれをもとに昭和二十六年、「市立神戸美術館」として開館。「神戸市立南蛮美術館」と改称するのは昭和四十年のことである。長年親しまれた南蛮美術館は神戸市立博物館の開館とともに発展的解消した。旧南蛮美術館の建物は現在神戸市文書館である。



(神戸市文書館…こうべしもんじょかん)

## 「神戸市立外国人墓地」

住所表示だと北区になるのだが、再度山山頂近くにある欧米外国人家族専用の墓地。再度公園の修法ヶ原池の西北に位置し、広大な敷地に、日本人の生活・文化に影響を与えた著名人を含む、世界六十カ国二千六百柱が埋葬されている。ここには堺事件で犠牲になったフランス水兵十一名が埋葬されており、今でも、フランス艦船が神戸港に入港する度に乗組員一同が訪れて祈りを捧げることが知られている。

一八六七年、旧生田川口東岸の小野浜に最初の埋葬が行われた。

一八九九年、小野浜の外国人墓地が閉鎖される。春日野（中央区籠池通）に外国人墓地が設けられる一九五四年、春日野墓地が閉鎖され、一九六〇年、現在の地への移転が始まる。一九六一年、現在地に移転が完了した。墓地は立ち入り禁止だが、展望台への立入は自由である。

神戸に居留地が設定された時の条約によって、明治二年兵庫県は、約二千二百坪を外国人共同墓地として開いた。明治三二年に神戸市が引き継ぐことになった。小野浜には余地がなくなったので、春日野にも外国人共同墓地を増やした。ところがその後、小野浜は神戸のビジネスセンターの中心となり、神聖にして静かに霊の眠るところとしては、ふさわしくなくなったので、各国関係政府の了承を得て、昭和二七年に再度山修法ヶ原へ移設された。

慶応四年（一八六八年）明治元年）二月、泉州堺でフランス人水平と土佐藩主の衝突事件が起こり、十一名のフランス水兵が殺された。その責めを負って十一名の土佐藩主が妙国寺で切腹した。宝珠院に切腹した土佐藩士十一名の墓がある。

フランス人水平十一名の墓は小野浜から現在の地へ移された。

当時フランス軍艦デュプレクス号は神戸に停泊し、堺へ測量に行った時の出来事で、外交史上同年正月の神戸事件とともに有名である。

三ノ宮駅から市バスで「森林植物園」か「再度山」行バス三〇分、「再度公園」下車徒歩三分（冬季運休）



（神戸市立外国人墓地）

## 「神戸事件」

神戸事件は、慶応四年一月十一日（一八六八年・明治元年）三宮神社前において備前藩（現・岡山県）の兵が、隊列を横切ろうとしたフランス人水兵らを負傷させたうえ、居留地の予定地を検分中の欧米諸国公使らに水平射撃を加えた事件である。明治政府初の外交問題となった。

この事件により、一時、外国軍が神戸中心部を占拠するに至るなどの動きにまで発展したが、その際に問題を起こした隊の責任者であった滝善三郎が切腹する事で一応の解決を見た事件。

慶応四年一月に、戊辰戦争が始まった。間も無く、徳川方の尼崎藩を牽制するため、明治新政府は備前藩に摂津西宮の警備を命じた。備前藩では一月五日に兵を出立させた。このうち家老・日置帯刀（へきたてわき）率いる八百人は大砲を伴って陸路を進んだ。



この際、慶応三年の兵庫開港に伴い、大名行列と外国人の衝突を避けるために徳川幕府によって作られた「徳川道」を通らずに西国街道を進んでしまった。一月十一日昼過ぎに、備前藩の隊列が神戸三宮神社近くに差しかけた時に、付近の建物から出てきたフランス人水兵二人が隊列を横切ろうとした。これは日本側から見ると武家諸法度に定められた「供割」（ともわり）と呼ばれる非常に無礼な行為で、これを見た第三砲兵隊長・滝善三郎正信が槍を持って制止に入った。しかし、言葉が通じず、強引に隊列を横切ろうとする水兵に対し、滝が槍で突きかかり軽傷を負わせてしまった。

薩英戦争にまで至った生麦事件の二の舞を避けるために、徳川幕府は「徳川道」（大名道）と呼ばれる街道を整備した。

その道筋は、西から、大蔵谷で街道と分かれて北に入り、高塚山を通過して、白川から藍那へ抜け東へ向かい、西小部から有馬街道を越えて、森林植物園

を東へ、摩耶山の北を進み柚谷峠（そまだに）を下り篠原を経て御影に出るといふ大迂回路であつて実際にはほとんど使われずに直ぐに廃道となつた。備前藩の隊列がこの道を通る可能性は低かつたと考えざる負えない道である。



（神戸事件碑…三宮神社）

## 「北野異人館街」

慶応三年、諸外国に兵庫港を開いてしばらくして、外国人が居留地に近く優れた住環境を求めてこの地に居住するようになった。明治二十年頃から本格的な外国人住宅地として発展し、通称「異人館」と呼ばれる洋風住宅と和風住宅が混在した、神戸独自の異国情緒あふれる豊かな住宅街が形成されていった。

異人館の保存・活用が本格化したのは一九七〇年代以降のことである。住民や商業者が協力し、界隈の道に愛称を公募し、北野坂・ハンター坂・不動坂・北野通りなどの名が付けられた。これがきっかけで街路整備から異人館や景観の保全活動へと進んでいき、市が風見鶏の館や萌黄(もえぎ)の館を借り上げて公開したことをはじめ、昭和五五年(一九八〇年)には文化財保護法による伝統的建造物群保存地区の指定を受け、保存・修理に取り組むように

なった。さらには遊歩道の整備、シテイループの運行など、建物だけでなく、街全体の観光地化が進んでいった。

北野界限のもうひとつの楽しみが、異国料理の食べ歩き。神戸には三十カ国以上もの異国料理店があるが、中でもこの界限には中国、フランス、イタリア、スイス、インドなどの各国料理の店が多く、開港以来この地に住まった外国人のために外国人シェフが広めたという伝統の味が楽しめる。

さらに秋にはジャズストリートの聞き歩きが楽しめる。毎年十月、内外のジャズ・メンがつどい、街中にジャズの音色が響く。遠くからジャズファンが詰めかけ、まちは賑わう。

異人館街は非常に神戸の雰囲気とマッチし、神戸を代表する観光地となっている。

北野町の町名は、山麓にある北野天満神社から起った。



(北野通り  
異人館街)

## 「神戸電信発祥の地」

明治三年、この所に神戸伝信機局が置かれ八月二十日大阪との間に始めて通信が行われました。開局三十周年を記念して石碑が建てられた。

(神戸市中央区新港町、国道二号線 京橋交差点南東)



(神戸電信発祥の地碑)

## 「神戸海軍操練所」

神戸海軍操練所は、元治元年（一八六四年）五月に、軍艦奉行の勝海舟の建言により幕府が神戸に設置した海軍士官養成機関、海軍工廠（こうしょう）である。現在の神戸市中央区新港町周辺にあった。京橋筋南詰には神戸海軍操練所跡碑がある。

明治維新の中心人物として幕末の志士たちに大きな影響を与えた勝海舟は、神戸を拠点に壮大な構想を実現させようとした。文久三年（一八六三年）、鎖国政策の崩壊により海防の必要性が高まっていた折、勝海舟は神戸に海軍操練所の設立を提案した。これは海軍兵学校と海軍機関学校を兼ねたものであり、日本に欧米と肩を並べる海軍を建設するための足がかりを作ろうとしたのであった。翌年の、元治元年から勝は生徒の募集をはじめるが、幕府に反対する者でも入所を認めたことが大問題となり、わずか一年で操練所は閉鎖

されてしまう。操練所の開所期間は非常に短かったものの、その間に坂本龍馬・陸奥宗光（むつむねみつ）など新しい時代を担う人々を育て、日本の海軍の歴史にも大きな足跡を残した。この時に坂本竜馬が神戸に来たかどうかは定かではない。

海軍操練所跡は現在の中央区新港町にあり、錨（いかり）の形をした記念碑が建てられている。（神戸電信発祥の地碑の隣）





(神戸海軍操練所跡碑)

## 「日本マラソン発祥の地」

明治四二年（一九〇九年）三月二一日、神戸の湊川埋め立て地から大阪の西成大橋までの三一・七キロの「マラソン大競争」が行われた。

日本で「マラソン」という名称を使ったのは、この大会が初めてと言われる。参加申込者は四百人以上にのぼり、体格試験によって百二十人にしぼりこまれた。鳴尾競馬場で予選が実施され、出場選手二十人が決まり開催。

一位は、岡山県在郷軍人の金子長之助選手で、御影付近で、わらじの緒が切れるアクシデントがあつたが、脱ぎ捨てて走り続け優勝した。

神戸マラソンのスタート地点でもある神戸市役所前に、「日本マラソン発祥の地 神戸」の記念碑が建てられた。

日本で初めて 組織的に記録を競う形式の競走を行ったということとで、「日本マラソン発祥の地」とされている。



(日本マラソン発祥の地 神戸の記念碑)

## 「生田神社」

神功皇后の三韓外征の帰途、神戸港で船が進まなくなった為神占を行った所、稚日女尊が現れ「吾は活田長峽国に居らむと海上五十狭茅に命じて生田の地に祭らしめ。(私はいくたのながさの国に居りたいのです。うなかみのいそさちに命じて生田の土地に祀らせて欲しい)」との神託があつたと日本書紀に記されている。

当初は、現在の新神戸駅の奥にある布引山「砂山」(いさごやま)に祀られていた。延暦十八年(七九九年)の大洪水により砂山の麓が崩れ、山全体が崩壊するおそれがあつたため、村人の刀祢七太夫が祠から御神体を持ち帰り、その後到现在地にある生田の森に移転したと伝わる。

平城天皇、大同元年(八〇六年)に「生田の神封四十四戸」と古書には記され、現在の神戸市中央区の一部が社領であつた所から、神地神戸(かんべ)

の神戸（かんべ）がこの地の呼称となり中世には紺戸（こんべ）、近年に神戸（こうべ）と呼ばれるようになった。

神階は貞観元年（八五九年）に従一位まで昇った。延喜式神名帳では「摂津国八部郡 生田神社」と記載され、名神大社に列し、月次・相嘗・新嘗の幣帛に預ると記されている。

社殿は、昭和十三年（一九三八年）の神戸大水害、昭和二十年（一九四五年）の神戸大空襲、平成七年（一九九五年）の阪神・淡路大震災など何度も災害等の被害に遭い、そのつど復興されてきたことから、「蘇る神」としての崇敬も受けるようになっていく。

延暦十八年の大洪水の際、社の周囲には松の木が植えられていたが、全く洪水を防ぐ役割を果たさなかった。その故事から、今でも生田の森には一本も松の木は植えられていない。また過去には能舞台の鏡板にも杉の絵が描かれ、元旦には門松は立てず杉飾りを立てる。



(生田神社)

## 「相樂園」

相樂園は、都市公園・日本庭園。日本の文化財保護法に基づく登録記念物の最初の登録物件である。ツツジの名所として知られる。

三田藩士・小寺泰次郎が幕末から明治維新の混乱で困窮する三田藩の財政を立て直すべく、九鬼隆義、白洲退蔵（白洲次郎の祖父）らとともに神戸で事業を起こし実業家として成功を収め、小寺の私邸として建設されたもので、一八八五年頃から築造を始め一九一一年に完成させた広大な庭園と邸宅である。当初「蘇鉄園」と呼ばれていたが一九四一年に神戸市が譲り受け、名称を中国易経にある「和悦相楽」より取った「相樂園」と変えて一般公開されるようになった。

庭園の形式は池泉回遊式（ちせんかいゆうしき）を基本としているが、西洋文化の影響をうけて広場が設けられている。

戦前までは園内に小寺家本邸をはじめとする多数の建造物があった。しかし西洋風の旧小寺家厩舎（重要文化財）以外は全て一九四五年六月の神戸大空襲により焼失した。現存する大楠や蘇鉄林、大灯籠、塀、門などから失われた邸宅の雄大さをうかがうことができる。

第二次大戦後になって神戸市生田区（現・中央区）北野町から旧ハッサム住宅（重要文化財）が移築保存され、神戸市の迎賓館施設として相楽園会館、茶室「浣心亭」が建設され、さらに神戸市垂水区から船屋形（重要文化財）が移設されて現在の景観に至る。

小寺泰次郎の長男である、小寺謙吉はここで生まれ育った。

第十一代神戸市長であった彼は、三田学園の創設者でもある。

昭和十六年（一九四一年）三月に神戸市が譲り受け公園として整備した。





(相楽園 日本庭園)

## 「花隈城址」

花隈城は元は花熊城と書いた。永禄十一年（一五六八年）、織田信長の命令によつて、摂津の荒木村重が一年で築いたといわれる。信長が尾張から起つて国家統一の志を持つて京都に入り中国地方をも平定する足掛かりとするためであつた。城の地点は、神戸の海にのぞんで突き出た大地で、海陸の要害地を占めていた。

城の規模は、本丸、二の丸、三の丸があり、天守閣を備え、櫓（やぐら）もあり、本丸の周囲と二の丸、三の丸合わせた周囲とに堀があり、近世城郭の形態を完備して威容を示していた。

荒木村重は、その後、石山本願寺（大坂本願寺）の宗徒と呼応して信長に反抗したため、信長は池田信輝（恒興）らに花隈城を攻めさせた。信輝らは一挙に攻めるのは不利と見て、生田の森、諏訪山、大倉山などの要所に砦を

構えて、ゆっくりと攻めかけた。天正八年（一五八〇年）閏三月二日から初めて七月二日について落城させたのである。

落城後に信輝は、この城の材料の一部を利用して兵庫城を築き、一部の石は大坂城を築くときに運ばれたと伝えられている。この付近の土地の字に城に關したなど多くのこっている。城跡一部の花隈公園は戦後荒廢していたが、近年は城跡公園として整備され、その地下に市営駐車場が設けられている。

三木合戦のおり、別所氏は播磨三木城に籠城し羽柴秀吉軍と対峙していた。荒木村重の領国摂津は、三木城から六甲山地を挟んで南側に位置する。これによって、摂津の港で兵糧を陸揚げ花隈城から丹羽山を越え三木城へという新たな補給路ができた。

秀吉の部将黒田孝高が説得に向かったが、村重に捕らえられ有岡城に幽閉された。

花隈城も四ヵ月ほどで陥落し、毛利からの兵糧も途絶えた三木城は悲惨な結末をむかえることになった。



(花隈城址…花隈公園)

## 兵庫区の歴史 「会下山」

会下山（えげやま）は、神戸市兵庫区会下山町にあり、長田区との区境に隣接丘陵地帯。広さ一万二千坪の会下山公園となっており、桜の名所、神戸の夜景スポットとしても知られている。

会下とは、仏教用語で会堂や師匠の常在する集団修行場を意味し、地名としても全国に多く見られる。

一本松古墳という竪穴式古墳が存在した。湊川改修により新しく新湊川トンネルを掘削した時（二〇〇〇年竣工）、大きな建物の礎石、古墳等が見つっている。古くから人が生活していた跡があり、現在の神戸の発祥地と表現されることもある。眺めが良く、軍事上の要衝でもある。

会下山の西南に雄伴郡（おともぐん）の郡衙（郡家）があった。

その直後、平清盛による、経が島築造が行われ、崩された塩樋山に大己貴

命を祀っていた神社とも纏められて現在の生田齋神八社の一社である七宮神社になったと伝わる。

古くは、法隆寺の寺領としても知られ、天平十九年（七四七年）の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帖」には、「雄伴郡宇治郷宇奈互丘」あるいは、「宇奈五丘」（うなごおか）の名で記載されている。「宇奈互」は、長田神社の祭神事代主命の別名「雲梯（うなて）の神」が、かつて祀られており、これが訛ったとされている。

会下山南方にある、上沢遺跡からは、奈良時代く平安時代の掘立柱建築物址、井戸址、軒瓦、硯、役人用の帯金具、彩釉陶器、全国でも珍しい完品出土物となった佐波理（さはり）鏡が出土している。

須磨寺は、淳和天皇の時代に大輪田泊の海中から漁師によって引き上げられ、一時、会下山にあった恵偈山北峯寺（えげさんほくほうじ）の本尊とされていた聖観音菩薩を光孝天皇の勅願で現在地に移して創建されたという。

建武三年（一三三六年）、湊川の戦いでは、楠木正成が会下山に本陣を置いてわずか数百名の手勢で数万の足利尊氏の軍を迎え撃った。（湊川合戦）

この会下山は、古くは大和法隆寺の領地であったことが、法隆寺にのこる「法隆寺伽藍縁起并流記資財帖」（ほうりゆうじがらんえんぎならびにるきしざいちよう）に記されていて、当時は、「宇奈五丘」（うなごがおか）と呼ばれていた。そこには、東は「弥奈刀川」（みなとがわ）、南は「加須加多池」（かすかたいけ）、西は「凡河内寺山」（おおしこうちのてらやま）、北は「伊米野」（いめのゝ夢野）と記されており、現在の会下山辺りにあたる。

この記述は、神戸に係する地名記録で最古のものだろう。





(会下山公園の桜)



## 「湊川合戦陣所跡」

湊川合戦の時、楠正成の陣所について当時の資料は残されていないが、延宝八年（一六八〇年）の、「福原びんかがみ」によると、長田村を「建武年中楠河内判官正成陣所」と記されている。「太平記」には、「湊川の西の宿にひかえて陸路の敵に備えた」とあり、「梅松論」には、「湊川の後ろの山より里まで」と記されている。

この時、新田義貞の軍は、和田の松原燈籠堂から経ヶ島、本体は二本松（兵庫駅付近）あたりに布陣していた。楠木正成の会下山の陣所から新田義貞軍を見ると、一直線上に大軍が見えたことだろう。

湊川の戦いは、南北朝時代、建武三年（一三三六年）に、摂津国湊において、九州から東上して来た足利尊氏・足利直義兄弟らの軍と、これを迎え撃

った後醍醐天皇方の新田義貞・楠木正成の軍との間で行われた合戦。

この年の初め、足利尊氏は新田義貞・楠木正成・北畠顕家らに敗れて京都を追われ九州へ落ち延びていた。ここで、楠木正成が後醍醐天皇に、状況が宮方に有利な今のうちに足利方と和睦する事を進言するが、後醍醐はこれを退け、義貞を総大将とする尊氏追討の軍を西国へ向けて派遣した。なお、正成は和睦を進言した事で朝廷の不信を買ひ、この追討軍からは外され、国許での謹慎を命じられた。

新田義貞は播磨国の白旗城に籠城する足利方の赤松則村（円心）を攻めている間に時間を空費し、この間に尊氏は多々良浜の戦いで九州を制覇して体制を立て直すと、京都奪還をめざして東進をはじめた。尊氏は高師直（こののもろなお）らと博多を発ち、備後国の鞆津を経て、四国で細川氏・土岐氏・河野氏らの率いる船隊と合流して海路を東進した。

尊氏軍の東上に遭い、撤退を始めた新田軍に赤松勢が追撃を仕掛け、新田

軍は大量の寝返りや足利軍への投降者を出しながら敗走した。一気に陣營がやせ細ってしまった義貞は、兵庫まで兵を退いて体制を立て直しを図った。

後醍醐天皇は正成に兵庫で足利軍と戦うよう命じ、援軍として差し向けた。水軍を用意できなかった新田軍は、本陣を二本松に置き、和田岬にも脇屋義助・大館氏明などの軍勢を配置して水軍の上陸に備えた。楠木軍は湊川の西側、本陣の北西にあたる会下山に布陣した。

合戦では、足利直義を司令官とする陸上軍の主力は西国街道を進み、少弐頼尚（しようによりなお）は和田岬の新田軍に側面から攻撃をかけた。また、斯波高経の軍は山の手から会下山に陣する楠木正成の背後に回った。さらに、細川定禅が海路を東進し生田の森から上陸すると、義貞は退路を絶たれる危険を感じて東走し、楠木軍は孤立する。

ここで誰も居なくなった和田岬から、悠々と尊氏の本隊が上陸した。楠木正成は重囲に落ち、奮戦するものの多勢に無勢はいかんともしがたく、楠木

軍は壊滅。正成は弟の楠木正季ら一族とともに自害した。

新田義貞は西宮から軍勢を返すと、生田の森を背にして足利軍と激しく激突した。合戦は「新田・足利の国の争ひ今を限りとぞ見えたりける」との激しさに及んだ。合戦の規模からすると、新田と足利の合戦が湊川の合戦の本戦と呼べる。

しかし、兵力差は歴然であり官方は敗北、義貞は求塚において源氏重代の鬼切、鬼丸の太刀を振るって奮戦し、大将みずから殿軍を務めて、味方を都へと退却させた。この際、窮地に陥ったところを義貞に恩義のある小山田高家が駆けつけ、身替わりとなって義貞の命を救っている。

当時の神戸市付近は、現在よりも海面が高かったこともあり、今以上に海が六甲山地に迫っていて平地が狭く、大軍の行動には適さなかった。そのため、官方は水軍を全く持っていなかったことが決定的な敗因となった。

## 「湊川神社」

湊川神社は、ご存知の通り所在地は、神戸市中央区多聞通ではあるが、楠木正成を祭る神社であるので、ここで紹介させて頂く。

地元では親しみを込めて「楠公（なんこう）さん」と呼ばれている。

建武中興十五社の一社で、旧社格は別格官幣社（べっかくかんぺいしゃ）である。

神戸の人々は、この神社があることを結構誇りに思っているし、忠義の人であった楠木正成を大楠公と崇めたり、楠公さんと親しみを込めて呼んだりする。

幕末、維新志士たちは、武家政権を倒し天皇親政を実現しようとした南朝の忠臣らを自らに重ね彼らを理想とした。特に楠木正成はその忠臣の筆頭に挙げられ、多くの維新志士が彼の崇拜者となり、その祭祀を行った。

明治維新の意義は、公的には神武創業に回帰するという意味が岩倉具視らの強い主張により与えられたが、実際の倒幕運動はむしろ建武の新政を理想として行われたものであった。それは江戸時代に儒学の興隆によって興った南朝正統論に起源するものである。

明治維新が実現すると、楠木正成は、皇室に忠義を尽くした第一の功臣として顕彰され、神社が建てられることとなった。神社の創建には薩摩藩、尾張藩、水戸藩などが主導権を争ったが、最終的に神社は国家が祀るものとして、政府が主導して建てられた。

湊川神社の創建は、これに続く南朝関連の人物を祀る神社創建の嚆矢となり、別格官幣社に代表される、功績のあった人物を神社に祀る風習のさきがけとなるなど、近代神社史上、無視できない重要な位置を占めることとなる。

誠忠（せいちちゆう）の正成公を慕う人々によって正成公の塚（墓）は大切にされて、やがて墓は豊臣秀吉検地の際、免租地（めんそち）とされ、江戸時代には尼崎藩主青山幸利（あおやまよしとし）によって松と梅が植えられ、五輪の石塔が建てられた。

そして元禄五年（一六九二年）水戸光圀が、その墓に「嗚呼忠臣楠子之墓」の碑を立て、御墓所を立派に建立した。この御墓所が建立なるや、さらに多くの人々が墓前にお参りし、正成公を偲びその御遺徳（ごいとく）をたたえた。

明治維新の前後には、新しい日本の国づくりを願ったたくさんの方々が墓前に詣でつつ国事に奔走した。

これにより正成公景仰（けいぎよう）の気運がいよいよ高まると共に、幕末から維新にかけて正成公の御神霊（ごしんれい）を奉斎したいという国民運動が盛んになり、明治元年（一八六八年）、明治天皇は正成公の忠義を後世

に伝えるため、神社を創建するよう命じた。

明治五年（一八七二年）、湊川神社が創建された。

延元（えんげん）の戦いで奮戦し、誠忠と正義とを以て生涯を貫いた正成公に対する景仰は積年変わることなく、現在も全国からたくさんの方々が参拝者を迎える。

湊川神社は日本有数の名社として崇敬されており。



## 「柳原のえびっさん」

蛭子神社（ひるこじんじや）は神戸市兵庫区西柳原町にある神社。  
通称、「柳原えびす」

福海寺と神社との間の道路には西国街道の兵庫の出入り口で東の湊口の惣門と同じく西の柳原惣門があった場所とされている。

兵庫七福神の一人、恵比寿が祭られている。

蛭子神社の御祭神は、蛭子大神（ひるこのおおかみⅡえびす様）と大物主大神。（おおものぬしの神Ⅱ大黒様）

主祭神の蛭子大神は、えびす様の総本山と呼ばれている西宮神社と同じ御祭神でもあり、漁業や海上安全、特に商売繁盛の神様で有名で、庶民親しみ深

くたいへん人気がある。また、「えびす」という言葉はよく見たり聞いたりすが、その字も様々で、戎・恵美須・恵比寿・恵比須などと記される。

「えびす神」の中でも一番古くから語られているのが、「古事記」「日本書紀」の国生みの段に登場する蛭子の神。

もう一神が事代主神（ことしろぬしのかみ）。

この神は『古事記』『日本書紀』によると大国主の御子神であるとされ、いずれにも船に乗っていたり、海辺で魚釣りを楽しんでいたように伝えられており、その様子がえびす様の御神影の釣り姿と結びつくところから「えびす神」の御神格に繋がるようだ。

えびす様のお顔は大きな福耳、凛々しい口髭と顎髭、にこやかな笑顔と大変特徴的な顔で、右手には釣り竿、左手には鯛という姿が一般的。

こうしたお姿を特長としながらも、時代によって描かれるえびす様はさまざまなものがある。

「舞子お台場」 (舞子砲台跡) 垂水区

明石藩舞子台場跡は、神戸市垂水区の舞子公園にある砲台跡。舞子砲台跡とも。国の史跡に指定されている。

幕末の文久三年（一八六三年）、將軍徳川家茂による大坂湾の海防状況視察の際に、砲台拡充の幕命を受けた明石城主松平慶憲により築造された。

工事は勝海舟の設計・総指揮、設備担当は幕使佐藤與之介、施工は明石藩で、ほか神戸海軍操練所等の協力による。竣工は一八六五年。建設の目的は、淡路島北端（淡路市）の徳島藩松帆台場跡（国の史跡）と対になって両岸から明石海峡を通過する黒船を挟撃することであったが、一度も使用されることはなく現在に至っている。

当時の一般的な台場は上部が土盛り形式であった。しかしここの台場は総石垣造である。明治時代末の火災により上部が撤去されたため高さ六メートル

ルとなった。二〇〇三年～二〇〇四年の発掘調査で全容を確認できたが、保存のため埋め戻されたため、現在は台場の一部と石垣の一部が地表に露出しているだけである。



(舞子台場跡)







「神戸ふるさと散歩」 東灘区、灘区、中央区編も今後加筆いたします。  
兵庫区、長田区、須磨区、垂水区、北区、西区編は、順次公開いたします  
ので、よろしくお願いいたします。

尚、記載してある数値などは、二〇一二年八月現在のものを採用しました。

本書で使用しました写真は、著者自ら撮影したものと許可を頂きまして掲載したものが大半ですが、一部写真に著作権者が不明なものがございます。お気づきの方が居られましたらお知らせ下さい。掲載許可の承諾を頂ける様に連絡をさせて頂きますのでお知らせ下さい。記述内容につきましては、筆者独自取材のものや過去の刊行物などを参考にいたしましたましたが、誤記などお気付きの点などございましたらお知らせ下さい。